

鹿児島県知名町埋蔵文化財発掘調査報告書

中甫洞穴

1984年3月

鹿児島県知名町教育委員会

序 文

沖永良部島における埋蔵文化財の発掘調査は、昭和32年九学会によって調査された住吉貝塚（知名町住吉金久）が最初であろう。

住吉貝塚からは、住居址の発見、土器、石器、獣骨、魚骨、貝類の出土等先史時代の貴重な報告がなされました。

又、町内には数多くの遺跡が発見されておりますが、今後の調査に期待を寄せているところでもあります。

中甫洞穴遺跡は、昭和47年に採集された土器をてがかりに発見された遺跡であります。本町では、近年、大規模な開発により埋蔵文化財に関して強い関心を有しているおりに幸い文化庁並びに県教育委員会の懇切な指導援助を得て、昭和58年9月、その発掘調査を実施することができました。

本書はその報告書であります。今後の調査、研究の資料として御利用いただければ幸甚に存じます。

おわりに、発掘調査にあられた各先生並びに関係者各位に深甚の謝意を表する次第であります。

知名町教育委員会

教育長 平良 清義

I 調査に至る経過

岸田善光氏によって中甫洞穴で土器類が採集されたのは、昭和47年頃のことである。昭和57年8月、資料蒐集のため和泊町の遺跡調査を行っていた河口は、これらの土器類を見る機会を得、須恵器、弥生中期や縄文前期に該当すると思われる土器片に混じって爪形文土器が存在することを発見した。従来、沖永良部島には縄文後期以前に遡る遺跡がなかっただけに、本洞穴は島の歴史を一気に書き換える遺跡として俄に注目されるに至ったのである。

近年、南島における考古学的調査の進展に伴って新しい事実が次々と判明し、その持つ文化内容も徐々に明らかにされつつあるが、縄文後期以前の様相については不明確な部分が多く、今後解明しなければならない数多くの問題点を残している。本洞穴の調査によってその一端を解き明かすべく、昭和57年10月5日より同15日までの11日間河口、本田、瀬戸口の3名で自主発掘を行ない、その成果についてはすでに報告したところである⁽¹⁾。この調査によって、上層部に弥生時代該当と思われる土器群を、下層部に縄文式の古いタイプ及びそれと相前後する時期の新型式の土器群を、さらに最下層部に2片の爪形文土器を検出でき、採集土器の層位的確認とともに新型式土器についていくらかの新知見を得ることができた。しかし、小範囲の調査でもあり、本遺跡の性格やその内容を知る上ではさらに継続して調査する必要性を痛感させられたのである。

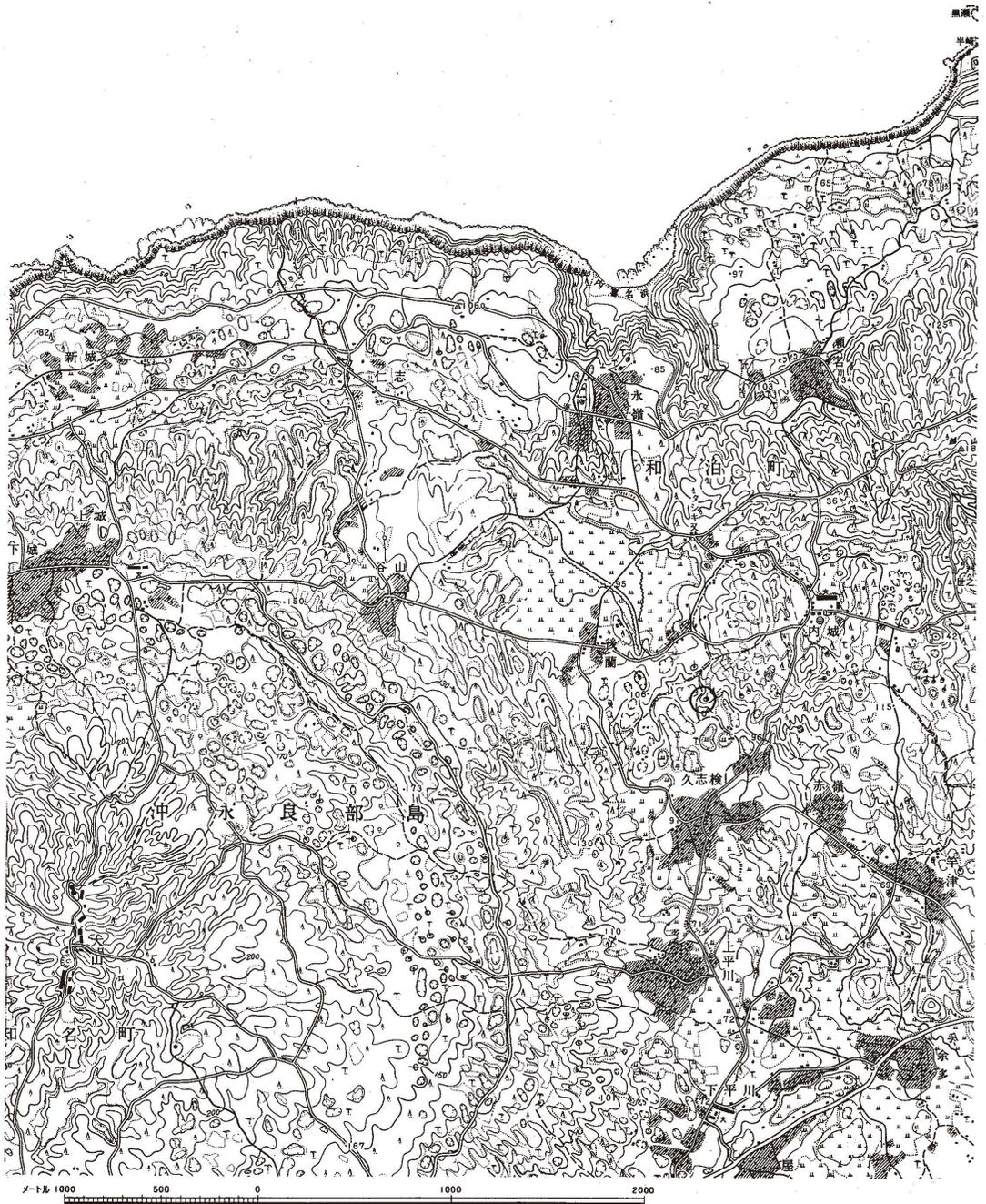
知名町教育委員会は、中甫洞穴の持つ重要性に鑑み、国・県の補助を得て調査を行なうことを計画し、昭和58年9月1日より同14日の14日間同教育委員会が主体となり発掘調査を実施した。

注

(1)河口貞徳他「中甫洞穴」 鹿児島考古第17号 鹿児島県考古学会 1983

II 調査の組織

調査主体者	知名町教育委員会
調査責任者	教育長 平良清義
事務担当	社会教育課長 神川一郎 社会教育課主事 大山 倭
調査担当	総括 河口貞徳（鹿児島県考古学会会長） 調査員 本田道輝（鹿児島大学助手） 瀬戸口望（日本考古学協会員）



第1図 遺跡地付近地形図 ○—中甫洞穴

調査作業員

大山吉照 岸田和夫 差司栄秋 富江和代 粟田つる子

中村マツエ 平ヒロ子 平みさ子 中馬礼子 下田くみ子

なお、遺物の水洗いについては鹿児島大学法文学部考古学研究室の学生諸氏、とりわけ岡元満子氏の多大な協力を得た。

III 遺跡と環境

沖永良部島は奄美諸島の南部にあり、徳之島と与論島の間位置し、鹿児島県本土から約536kmの距離を測る。周囲49.3km、面積94.51km²、和泊町と知名町に区分される。島の西部は弧状をなして幅広く、北東へ細長く延び長さ約20km、最大幅約9km、全体に低平で最高地点の大山で標高245.9mにすぎない。島を取り囲むように珊瑚礁が発達するが、特に南部海岸に顕著で、一方、北部海岸側では海食崖が連続してよく発達する。

島は、古生層を基盤として、数段の隆起珊瑚礁からなり、各段丘の斜面下には各所に湧水がみられる。大山山麓を中心にカルスト地形が発達し、ドリーネが数多くみられ、昇龍洞や水蓮洞に代表される鐘乳洞が多数分布する。

この地域は亜熱帯モンスーン気候区に属し、四季を通じて温暖で年平均気温は高く、気温の年較差は約4℃程度である。降水量は年2100mm程度とわが国としては多雨地域に属する。また、この地域は台風の常襲地帯で、先年の沖永良部台風では大きな被害を受け、現在では家屋の大半がコンクリート建てとなっている。

中甫洞穴は知名町東部の久志検水窪にあり、大山山頂より東々北3.56km、北部海岸線より2.2kmの内陸部に位置する。大山周辺に数多くみられるドリーネの一つで、径70m程度の窪地となり、付近にもいくつかのドリーネをみることができる。遺跡地は森林に覆われ、点々と石灰岩が露出しており、南東側と北西側の二カ所に地下の鐘乳洞へ通ずる洞穴が開口している。

南東側の洞穴は小規模で、特に開口部は狭く草木に遮られて見落す程であるが、北西側の洞穴は規模が大きく、いわゆる「中甫洞穴」と呼ばれるもので、南東方向へ大きく開口し、入口幅14m、奥行20m、天井の高さ5mである（第2図・図版1上）。洞穴入口の上面には切り立った石灰岩壁が露呈し、その上部は森林で覆われ、洞穴の天井からは無数の鐘乳石が垂下し、床面には巨大な石灰岩がよこたわり小規模な石筍群がみられる。

洞穴の西よりには、洞穴の床面をなす巨大な石灰岩の下に大きな空隙があり、下方へ傾斜して地下の鐘乳洞へ通じる斜坑を形成している。地下の鐘乳洞には水脈があって、北方向より南方向へ流れ、斜坑より南へは石灰岩の堆積で前進できないが、北側へは細長く洞穴が続いていて、いづこの場所へか出れるらしいが確認はしていない。

沖永良部島では現在25カ所の遺跡が知られているが、発掘調査された遺跡は数少なく、昭和29年河口によって行なわれた和泊町畦布わんじょうナーバンタ遺跡の試掘を最初として、昭和32年九学会による知名町住吉貝塚の発掘調査、昭和57・58年鹿児島大学と沖縄国際大学による

知名町スセン當貝塚・神野貝塚の発掘調査、昭和57・58年中甫洞穴発掘調査があげられるにすぎない。遺跡はほとんど海岸線近くに立地し、時期も縄文後期以降に限られた観があったが、神野貝塚における赤連系土器の発見や、内陸部に位置する中甫洞穴での爪形文土器・轟式土器やそれと相前後する時期の土器群の発見によって状況は大きく変化しつつある。

IV 調査の経過

前年度の調査結果を参考に、遺跡の広がりとその性格を明確にするため、洞穴入口中央部、洞穴入口東壁部、前年調査トレンチの東側隣接部および下部洞穴入口堆積部の4ヵ所にトレンチをいれ調査を実施した。トレンチ名は、前年調査トレンチを第Iトレンチとし、以下第Iトレンチより東側へ順次第II・III・IVトレンチと名づけ、下部洞穴入口堆積を第Vトレンチと呼ぶことにした(第2図)。

まず洞穴入口中央部に、洞穴入口と直交する形で2m×8.425mのトレンチを設け、南側より2m×2mを1区画として1～4区とした。したがって4区は2m×2.425mとなる。その後、調査の状況に応じて1・2区をそれぞれ東側へ2m拡張して5・6区を設け、あわせて調査を実施した(第IIIトレンチ)。さらに、4区西側に第IIIトレンチと直交する2m×4mのトレンチを設け、2m×2mを1区画として西側より1・2区とし、調査の進展に伴って1区を洞穴入口西壁まで延長する一方、1区北隣りに3区を設定した。1区西半は第Iトレンチ2・3区を含んで洞穴入口西壁までとなり、3区は第Iトレンチ3～5区を含んで、北側および西側がそれぞれ洞穴入口床面、洞穴入口西壁までをその範囲とすることになる(第IIトレンチ)。

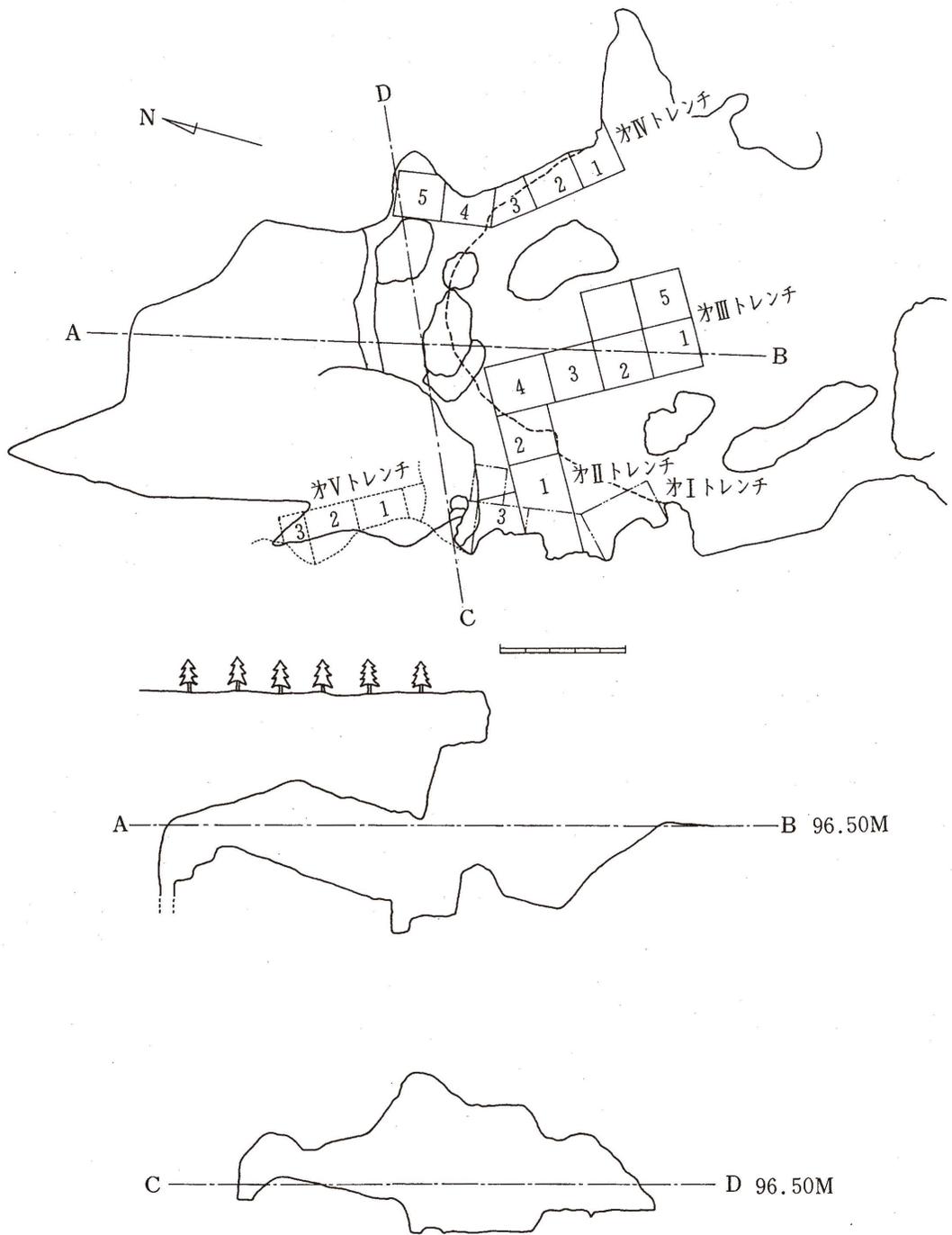
洞穴入口東壁部は、東壁の走向に従ってトレンチの方向をさだめ、トレンチ南端で2m幅にとり、トレンチ長軸を2mごとに区画して南より北へ1～5区とした(第IVトレンチ)。

下部洞穴入口堆積部とは、現在洞穴床面となっている巨岩下の空隙西南側にできた土砂の堆積部で、前年度その一部を試掘し多くの遺物を検出している。第IIトレンチ2区北西杭より、東側へ10cmの幅をとって第IIトレンチと直交する線を設定し、第IIトレンチ北側4.275mの点を基点として、南より北へ1区(長さ2m)、2区(長さ2m)、3区(長さ1m)とし、発掘途中より1区南隣りに0区(長さ92cm)を設けた(第Vトレンチ)。このトレンチは、南側は積みあげられた石灰岩礫まで、北および西側は下部洞穴西壁までをその範囲とする。

現在、洞穴前面は浸蝕されて播鉢状となり、下底部は下部洞穴へ通ずる斜坑となっている。そのため、第IIトレンチ周辺は東側へ、第IIIトレンチ周辺は北側へ、第IVトレンチ周辺は北および西側へ傾斜面を形成している。一方、下部洞穴入口の堆積は、西壁側に高く東へゆるやかに傾斜し、トレンチ東側杭列付近ではほぼ垂直に落ち、また第IIトレンチ3区周辺から下部洞穴へむかってもゆるやかな傾斜面が形成される現況をなし、洞穴入口西壁側の土砂がある時期浸蝕によって流入したような状況を示している。

次に各トレンチの発掘状況を述べる。

第IIトレンチは、前年度調査した第Iトレンチと一部重複して隣接し、前年度の成果から大



オ2図 中甫洞穴図

いに期待したトレンチである。1区東半および2区には極めて粘着力の強い土が堆積し、その中に大小の石灰岩が混じる。人力あるいは削岩機を使用して、これらの岩を除去しながら調査をすすめたが、やがて数トンもあろうかと思われる石灰岩群があらわれ、それ以下の調査は不可能となった。一方、1区西半および3区は、前年度の調査でほぼ基盤層面まで掘り下げていたが、一部未調査であった大岩の下周辺を掘り下げた。第IIトレンチの土の堆積は、1区では5層を数えるが、予想と異なり東側へしだいに導く、2区では第2・3層が欠落して表土層からただちに第4層となり、その第4層も50cm程の堆積で前述の石灰岩群となる。1区東半も同様に第4層が薄く、ほぼ前年度の第4層中部付近で石灰岩群があらわれ、以下の地層は石灰岩群の裂け目にわずかに堆積する程度となる。

以上のような状況から、遺物は前年度出土した轟式の取り残し分がややまとまる程度で、他は少量の土器片、石器、貝類、骨片が検出されにすぎない。これらは第2～4層（上・中部）から出土したもので、わずかに爪形文土器の細片1点が第4層下部で出土し、今回の調査で唯一の資料となった。基盤層とした第5層（灰褐色粘質土層）は、前年度は東側へ強く傾斜することが認められたが、今回は石灰岩群の出現で、その状況を知ることはできなかった。

第IIIトレンチは、3・4区が第IIトレンチと同様な状況で早々と放棄し、1・2区に調査を集中した。この付近は土の乾燥化が強く、極めて固くて掘り下げはなかなか困難である。掘り下げとともに、トレンチ西隣に地表露出していた石灰岩の基部がトレンチ内にしだいに迫り出し、地表下2m程で掘り下げは不可能となった。

地層は、各層とも北側へ傾斜して10層確認されたが、遺物の出土量は極めて少なく、わずかに第1層に陶器小片、第4層に青磁微細片、第8層に木炭と少量の土器片が出土したにすぎない。その後、第8層の状況をさらに調査するため、1・2区東隣りに5・6区を設定し掘り下げをおこなった。地層に変化はなく、第8層に少量の土器片が出土したにすぎない。第8層に検出された木炭は、一定の範囲に散布することが確認されたが、掘り込み等は認められなかった。5・6区とも時間の都合で8～9層まで掘り下げ、以下の地層の追求は中止した。

第IVトレンチは、1～4区には第IIトレンチと同様に極めて粘着力の強い土が大小の石灰岩を含みながら堆積し、人力でこれらを除去しながら掘り下げを進めた。1～3区は、地表下1～1.5m程で石灰岩群が全面に露出し、掘り下げが不可能となったため、その後は4区に調査を集中した。4区では、岩の裂け目に堆積する土を地表下2.5m程まで掘り下げ、灰褐色粘質土層に達することができた。一方、5区には石灰岩や石灰岩層が堆積し、土の堆積は認められない状況で、この区も地表下1.5m程で掘り下げを中止した。

地層は6層を確認したが、各区で堆積状況はやや異なり複雑である。第5・6層は部分的な確認で、その堆積状況が不明瞭であるが、おおよそ各層とも地表面の傾斜と同様に、北側（洞穴側）へ傾斜する一方西側へ傾斜する傾向にあり、下層ほどその傾斜は急となる。遺物は、1～3区では数点の土器片が第3b層から出土したにとどまり、5区でも石灰岩層から数点の土器片、獣骨片、人骨片がまとまりなく出土したにすぎない。わずかに、4区第4層で少量の土

器片、石器、獣骨片、貝類を検出し、中に1点復元可能な小形土器が、石斧2点を内蔵する状況で出土したのが目につく程度である。また、4区ではこの第4層を掘り込んで埋葬人骨が1体検出されている。その状況については後述する。

第Vトレンチは、前述のように前年度一部試掘した地点に設定し、その堆積状況や時期等について調査した。堆積土は、下部洞穴天井近くまであり、上面からの掘り下げは不可能なため遺物出土面まで縦はぎ法により掘り下げ、遺物出土面を順次広げる方法をとった。極めて粘着力の強い土が堆積することは他トレンチと同様であるが、石灰岩の混じる量は少ない。地層は調査中には分離できず、表面より20cmごとに土壌サンプルを採集して検討したが、表層以外には線引きするほどの色調や土質の変化は認められなかった。

遺物は、多量の土器片、獣骨片と少量の石器、貝類からなり、土器にはややまとまるものもみられる。それらは、0・1区東側の表面から1～1.5m程のところに集中し、他の箇所ではほとんど検出されない。遺物の出土状況は、堆積土の傾斜と同様に南から北へ、また西から東へ傾斜する傾向にあり、ある時期浸蝕作用等が原因して洞穴入口西壁周辺から流れ込んだものと思われる。第I・IIトレンチから出土した甕式と同一個体と考えられる土器片2点の存在は、それを物語るものであろう。

なお、調査中に洞穴床面を形成する巨岩上部の一部分に土が堆積するのを発見した。堆積土の上部には20cm程の厚さで石灰分が膜状に固着している。堆積土は10～15cmと薄い、土器片や獣骨、貝類を含んでおり、土器片の特徴から第Iトレンチ第4層該当期の遺物包含層ではないかと思われる。

V 層序

第IIトレンチ

前年度の調査と同様に5層に区分できるが、第2・3層は2区では欠落しただけに第4層となる。各層ともに北側へ傾斜する一方、東側へ傾斜する傾向にある。

第1層 黒色土層で厚さ10cm、乾燥して粒状を呈す。少量の石灰岩屑を含み、今回は遺物は認められなかった。

第2層 茶褐色土層で厚さ20cm、粘質が極めて強く石灰岩屑を含む。土器片が少量出土するが特徴がとらえられないものである。

第3層 暗褐色土層で厚さ15cm、粘質が極めて強く石灰岩屑を含む。土器片が少量出土し、有文のものもみられる。

第4層 褐色土層で厚さ1m、粘質が極めて強く石灰岩及び石灰岩屑を多く含む。遺物は、第Iトレンチに接する箇所で甕式の大片が出土した他は、土器小片、石器、貝類、骨片等が少量出土したにすぎない。遺物は1区に集中し、2区にはほとんど認められない。最下部で爪形文土器細片1点の出土をみた。

第5層 灰褐色層で粘質をおびる。前年度の調査で、東側へかなりの急傾斜をなすことが判

明したが、今回は石灰岩群の出現によってその堆積状況を明確にできなかった。1・2区ともに大岩の裂け目に堆積する。遺物は認められない。

第Ⅲトレンチ

掘り下げ面までに10層を確認した。各層とも、石灰岩や石灰岩屑の含有量は他トレンチほど多くないが、極めて固く、その掘り下げにはかなりの労力を要する。各層とも北側（洞穴側）へ傾斜する。

第1層 黒褐色土層で乾燥して粒状をなす。陶器片1点が出土している。

第2層 暗褐色粘質層で乾燥して固い。遺物は認められない。

第3層 褐色粘質層で乾燥して固い。遺物は認められない。

第4層 明褐色粘質層で乾燥して固い。遺物は、青磁微細片1点が出土した。

第5層 茶褐色粘質層で乾燥して固い。遺物は認められない。

第6層 紅褐色粘質層で乾燥して固い。遺物は認められない。

第7層 暗褐色粘質層で乾燥して固い。遺物は認められない。

第8層 黒褐色粘質層で乾燥して固い。木炭の散布する箇所があり、平底の底部を含む土器片少量が出土する。

第9層 赤褐色粘質層で乾燥して固い。遺物は認められない。

第10層 灰茶褐色粘質層で乾燥して固い。遺物は認められない。

第Ⅵトレンチ

掘り下げ面までに6層を確認した。各区において堆積状況はやや異なる。いずれの層も北側（洞穴側）へ傾斜する一方、西側（洞穴入口中央部側）へ傾斜する傾向にあり、特に第6層は急傾斜をなす。

第1a層 全区に認められ、黒色土層で乾燥して粒状となる。遺物は認められない。

第1b層 4区および5区の一部に認められ、石灰岩屑を多量に含む黄褐色粘土層である。土器片数点と砥石が出土し、平底の底部と凸帯をもつ土器片がみられる。

第2層 1～3区に広がり4区付近で消失する。暗褐色土層で、石灰岩や石灰岩屑を含み、極めて粘質が強い。遺物は認められない。

第3a層 1区付近にのみ存在する淡暗褐色土層で、石灰岩や石灰岩屑を含み極めて粘質が強い。遺物は認められない。

第3b層 2・3区および4区西側に堆積する黒褐色土層で、石灰岩や石灰岩屑を含み極めて粘質が強い。少量の土器片を包含し、平底の底部もみられる。

第4層 1～4区に堆積する褐色土層で、下部は茶色味が強くなる。石灰岩や石灰岩屑を含み極めて粘質が強い。大半の区域では、この層の下に石灰岩群があらわれ掘り下げが不可能となったが、4区では岩の裂け目に厚く堆積し西側へ傾斜する。4区では少量の土器、石器、貝類、獣骨などが出土するが、他区では遺物の出土は認められない。

第5層 部分的に岩の裂け目に堆積する赤褐色土層で、極めて粘質が強く石灰岩屑を含む。

下部では赤褐色土まじり石灰岩層となる。遺物は認められない。

第6層 4区にのみ確認した灰褐色粘質層で、上部層に比して粘質弱く、西側へ急傾斜をなして堆積する。遺物は認められない。

なお、5区の大部分は薄く第1層が堆積する他は、石灰岩および石灰岩屑が堆積し、土の堆積が認められなかった。人骨や獣骨が散乱状態で検出され、土器片数点も出土しているが時期を明確にできない。

第Vトレンチ

このトレンチの堆積土は、前述のように再堆積の可能性が高い。暗褐色土層で、表層は褐色味が強く、石灰岩や石灰岩屑をあまり含まない極めて強い粘質土である。遺物は、土器、石器、獣骨、貝類などからなり、特に土器、獣骨は多量に包含され、今回出土した遺物の大半を占める。それらの多くは、第I・IIトレンチの第4層該当時期のものであり、ただ2点時期が異なると思われる土器小片が存在する。

VI遺構 (図版3上)

第IVトレンチ4区で土拡張1基を検出した。この付近は第1a・1b層から直ちに第4層となり他層の堆積がみられない。土拡張は第4層を掘り込んでおり、石灰岩屑を含むあまり粘質の強くない暗褐色土を埋土とし、第1b層よりは古い。他層(第2・3a・3b層)との関係は明瞭でない。土拡張は隅丸の三角形をなし、頭位を南東方向にむけ、顔面や折り曲げた手足を東向きにした横臥屈葬の形態をとる人骨1体が埋葬されていた。

土拡張主軸両端、即ち頭骨上方と尾骨下方にはそれぞれ3個と2個の石灰岩礫が人骨を挟むような形で検出され、このうち尾骨下方の1個はその基部を4層内にもつ石灰岩礫であり、他の4個は土拡張底に基部をもつものである。これらは土拡張掘り下げ時に露出した石灰岩礫を利用し他の4個の石灰岩礫を加えて前述のように意図的に配置したものと考えられる。また、土拡張上位にも数個の石灰岩礫が認められたが、これらは土拡張と直接の関連があるのか明らかでない。

土拡張内には、人骨以外には何らの遺物も発見されず、この人骨の所属時期は明確にできないが、その埋葬形態はいかにも縄文時代的ではある。

VII 遺物

a. 自然遺物

自然遺物としては、貝類、魚類、甲殻類、動物骨類が出土した。これらは第Vトレンチからの出土が大半を占め、他のトレンチでは少量の出土である。貝類としては、ヤコウガイ、シャコガイ、サメザラ、マルニシ、ハチジョウダカラ、マダライモ、オニコブシ、オキニシ、アオガイ、フネガイ、マイマイ類があるが量的には多くない。

貝類を除く自然遺物については、鹿児島大学農学部西中川駿助教授に鑑定をお願いし、次のような所見をいただいた。

『中甫洞穴出土の自然遺物は、総重量2623.5g（貝類を除く）で、それらは哺乳類、鳥類、魚類および甲殻類で、哺乳類が99.2%を占める。哺乳類の中にはイノシシのものではあるが、細骨片のために骨の種類を同定できないものが554.0gある。哺乳類は、イノシシ2056.1g（499個の骨片）、ネズミ4.7g（23個）であるが、イノシシが全体の99.7%を占める。イノシシの出土骨の形状は、現生のリュウキェウイノシシにほぼ類似し、小型である。ネズミは大型のものでドブネズミかケナガネズミ大のものである。鳥類は3.2g（4個）で、ツグミ、キジバト大の骨が出土している。魚類は13.1g（4個）で、ブダイ、ハリセンボンなどのものである。甲殻類は、カニの鉗脚で、2.4g（3個）である。』

b. 人工遺物

今回出土した人工遺物としては、陶磁器、土器、石器をあげることができる。このうち陶磁器は第Ⅲトレンチ第1層および第4層から各1点小破片が出土したにすぎない。

土器

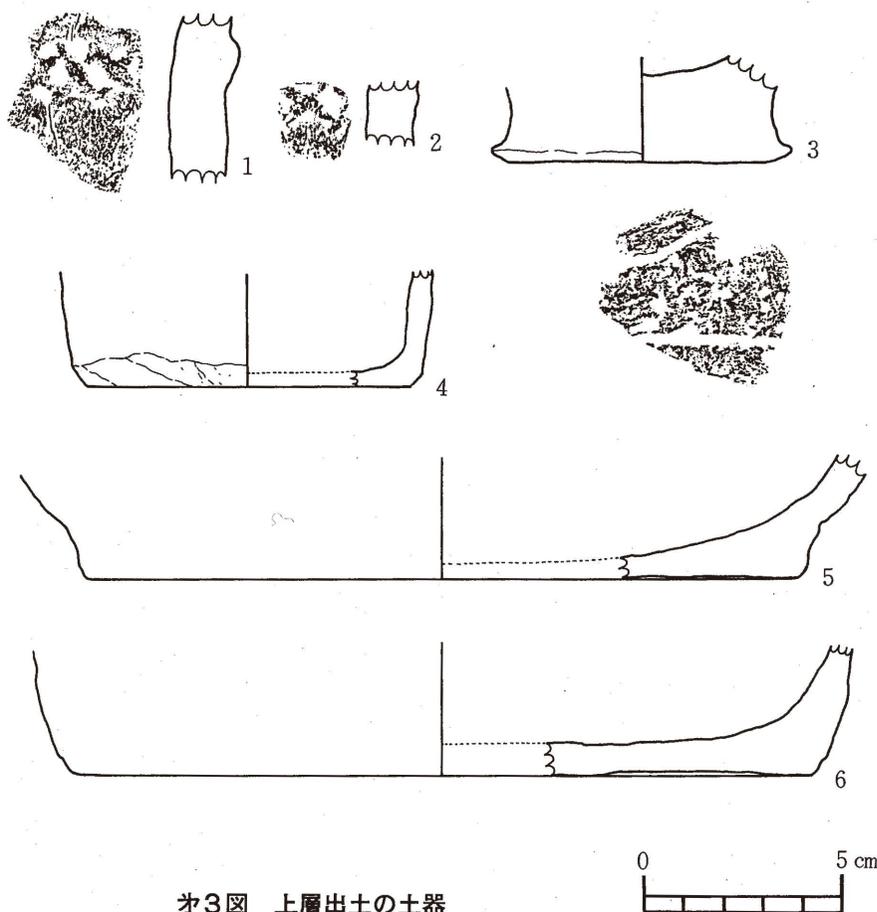
土器の出土量は、第Ⅴトレンチがその大半を占め、他のトレンチでは少量出土したにすぎない。上層出土土器と下層出土土器に大きく二区分して説明する。下層出土土器とは、前年度の第4層時代に該当し、上層出土土器とはそれより上部層時代に該当することを意味する。

上層出土土器（第3図・図版4上）

第Ⅱトレンチ2・3層、第Ⅲトレンチ8層、第Ⅳトレンチ1b・3b層出土の土器である。このうち、第Ⅱトレンチ2・3層では今回は特徴ある破片は見出せない。有文土器片数点があるがその施文法等から下層土器の浮き上がりである可能性が高い。第Ⅲトレンチ8層では、厚い平底底部1点（第3図3）があり、底面に木ノ葉様の圧痕が認められる。南島における木ノ葉底は兼久式にしばしば見られるものであるが、底部の厚さにやや違和感をおぼえる。第Ⅳトレンチ1b層では、短い粘土紐を格子状にはりつけて凸帯とする土器片（第3図1）や横位の凸帯に押圧して刻目を施した土器片が存在する。同類と思われる土器は、第Ⅴトレンチでも1点有文土器に混じって検出された（第3図2）。その他かなり大きな底部片が1点あり（第3図5）、外面は粗であるが内面は丁寧にナデ調整され器面には金雲母が多く見られる。3b層でも、同様な底部が出土しており（第3図6）、器形はやや異なるもののその特徴はよく一致する。土拵墓のやや東側に1b層と4層に挟まれて部分的に薄く堆積する黒色土が認められたが、そこでも底部1点出土し（第3図4）、底部外面の下端部をケズリ調整するという特徴があるが、他の特徴は上記土器に一致する。これらの底部は何らかの関連を有するものようである。金雲母混入土器は、第Ⅲトレンチ8層にも散見され、今後互いの層位関係を調査する必要がある。

下層出土土器（第4～10図・図版4下～図版9）

下層出土土器は、前年度層位的に分類されているが、今回は大半が第Ⅴトレンチ出土ということもあり、層位的には分類できない。よって、前年度の結果を参考に主として文様によって分類したが、いまだ全形が判明しない土器が多いため文様の展開についても不明な点も多く、



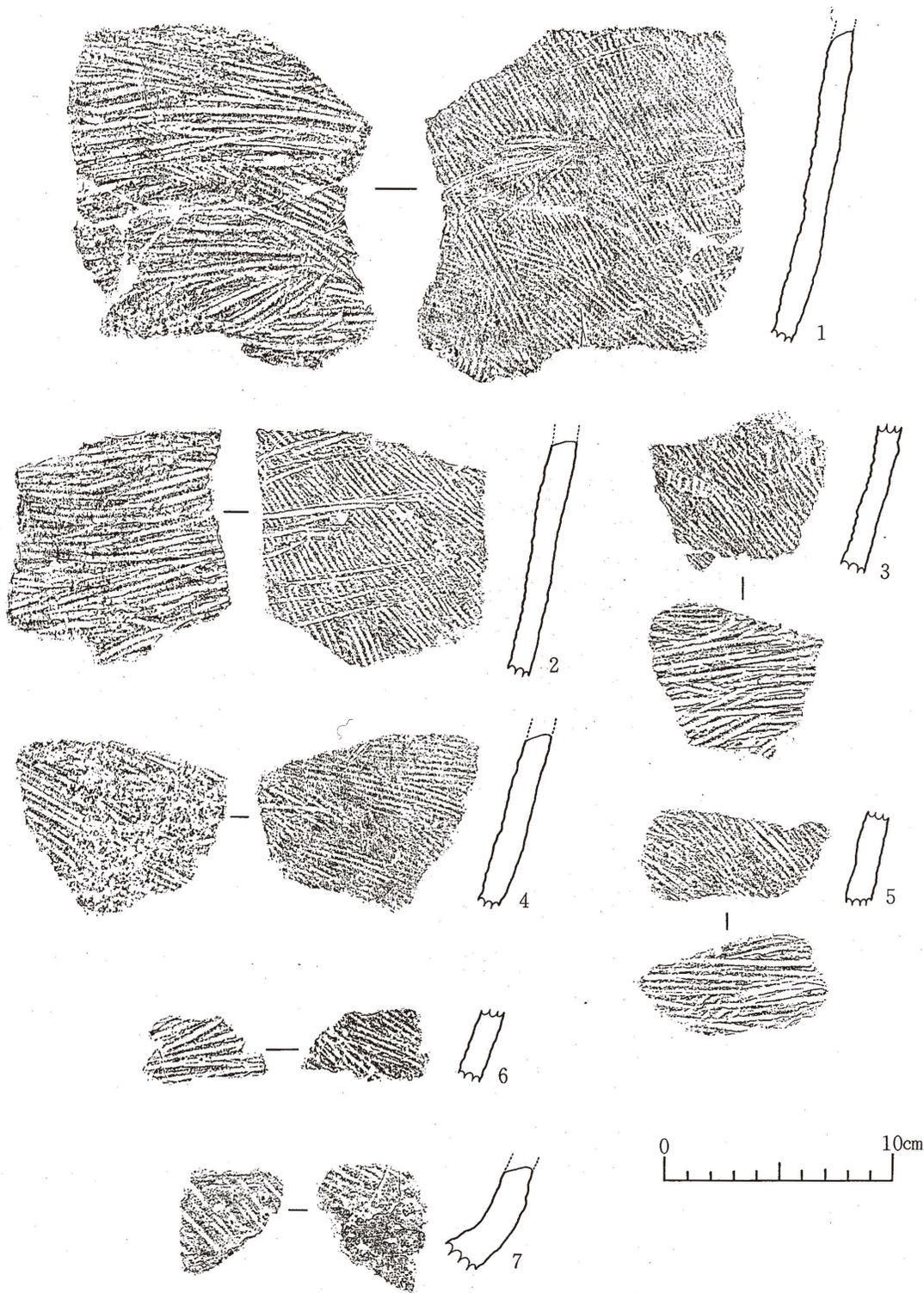
オ3図 上層出土の土器

あるいは同一個体の部位による文様の違いを二分類しているものもあるかもしれない。第IIトレンチ4層、第IVトレンチ4層、第Vトレンチ堆積層出土土器がこれに該当する。

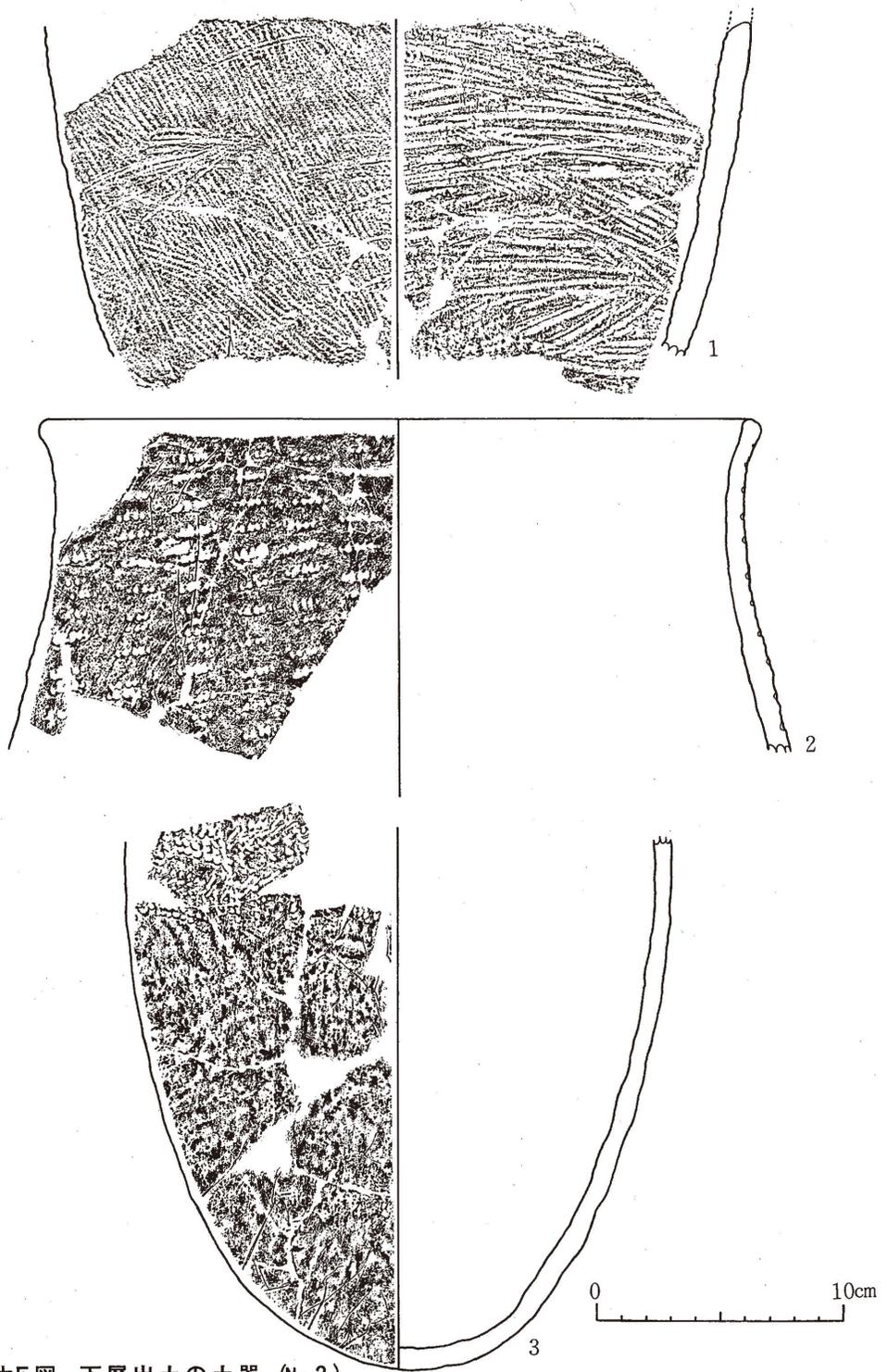
蠹式土器（第4図，第5図1，図版4下）

前年度第Iトレンチ4層中部を中心に出土し完形に復元されたものの取り残し分と思われる。第IIトレンチ1区西側（第Iトレンチとの境）でまとまって出土しているが、第Vトレンチでも同一個体と思われる破片2点が出土している。直口で深鉢形の器形をなし、輪積みの痕跡を明瞭に残す。器面の内外は、アナガラ属の貝殻腹縁によって調整され、内面は太目の肋をもつ貝殻でつけられた横位を主とする条痕が残り、外面は細目の肋をもつ貝殻でつけられた右下りの斜位条痕が残る。調整は外面が丁寧であり、内面は荒い。外面には箇所によって文様風の横走する条痕がみられる。胎土には砂粒を多く含み、焼成は他の土器と比較して良好であるが器面は剥離しやすい。色調は赭褐色～黄褐色あるいは黒褐色をなし、器壁は比較的厚い。

連点波状文土器（第5図2・3，第6図1～5，図版5）



茅4図 下層出土の土器 (No.1)



オ5図 下層出土の土器 (No.2)

前年度の調査で出土し復元されたものと同類で、第4層下部土器に並行する土器として取り扱われている。第Ⅴトレンチのみから出土し、かなりまとまるものも見られる。器形は、口径に対して器高が著しく高く、底部は丸底で口縁部は直口あるいは先端部が小さく外反し胴部へかけて膨らむものである。輪積みの痕跡を残し、胎土には砂粒（石灰岩粒を含む）が含まれ焼成はやや不良でもろい。色調は赭褐色～暗褐色が一般である。器面はナデ調整されるが、下胴部外面は付着した粘土粒をなでつけてブツブツした状態となっている。このような状態は、下層出土土器の胴部片にしばしば見出すことができる。

文様は、前年度の土器でその展開の仕方や施文法が明らかになった。口縁部上端から中胴部付近まで横に並んだ4～6個を単位とする連点を縦位、横位に列をなして施文し、その下部に接して短い幅で同様施文具による連点と波状に横引きする文様を加える。施文具は貝殻ではないかと思われる。連点の下際には粘土のたまりが見られる。

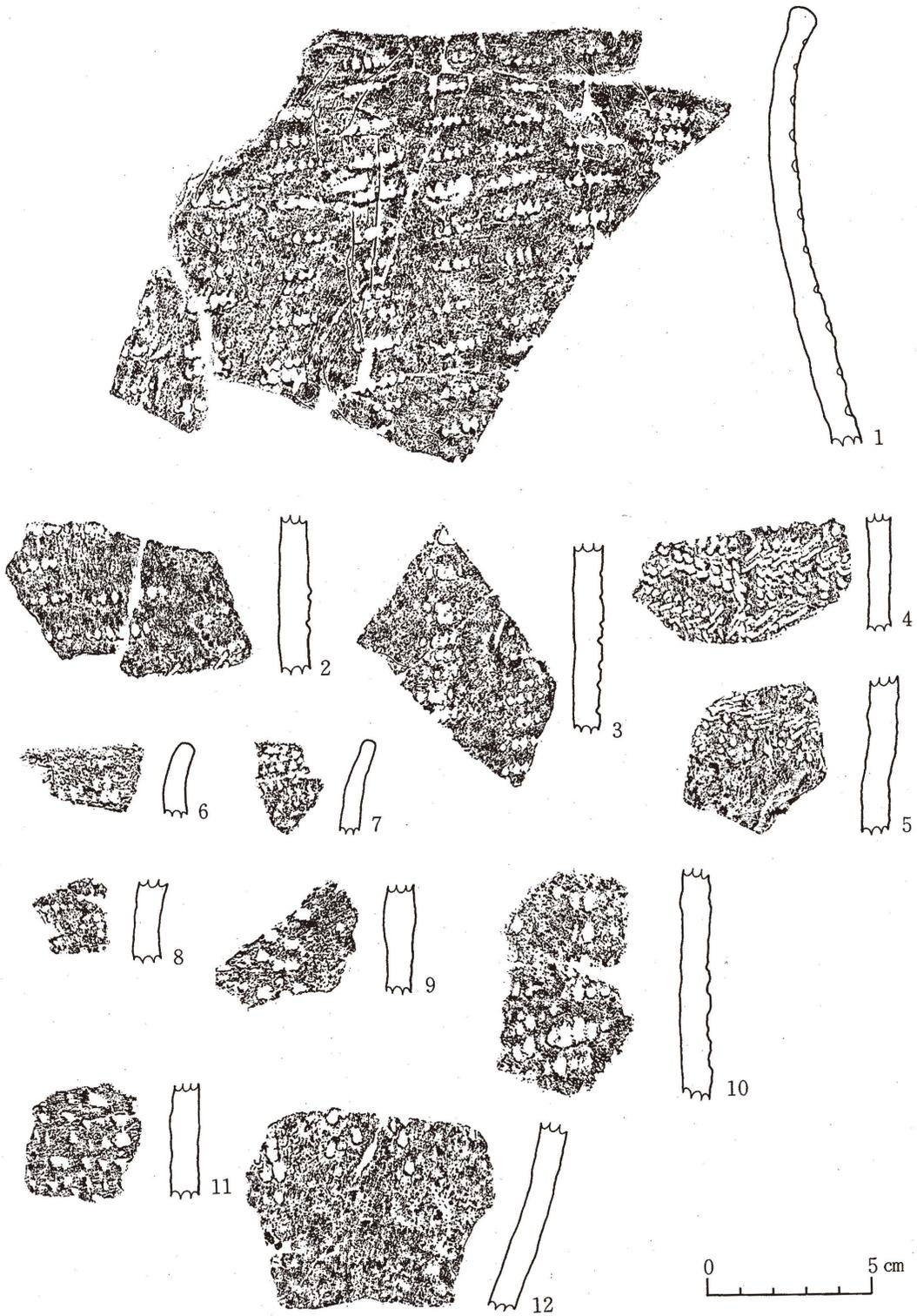
連点文土器（第6図6～12、第7図1～11、図版6）

第Ⅱトレンチで数点出土し、他は第Ⅴトレンチより出土した。前年度は、4層上部・中部・下部で区分されている。一般に連点波状文土器よりも連点が大きく、その下際に粘土のたまりができるのは同様である。数点で単位をなして縦列に規則性をもって連点が施文されるもの（第6図6～12）、連点が密に規則性なく施されるもの（第7図1）、連点が間隔をおいて1点ずつ施され、連点内に細い条痕が見られるもの（第7図2・3・7）、ヘラ状工具を横に刺突して1点ずつ縦列に連点（爪形文）を施すもの（第7図4～6）、同様工具を縦に刺突して文様を形成するもの（第7図9・10）、櫛状施文具で4点を1単位として斜位に連点が施されるもの（第7図8）、太目の連点（爪形文）を横列に施し、内部に細い条痕のみられるもの（第7図11）等がある。小破片であるため文様の全体感は掴めない。いずれの土器も砂粒を多く含み焼成はやや不良のものが多い。第7図4～6・10は、爪形文の系統に含まれるものである。

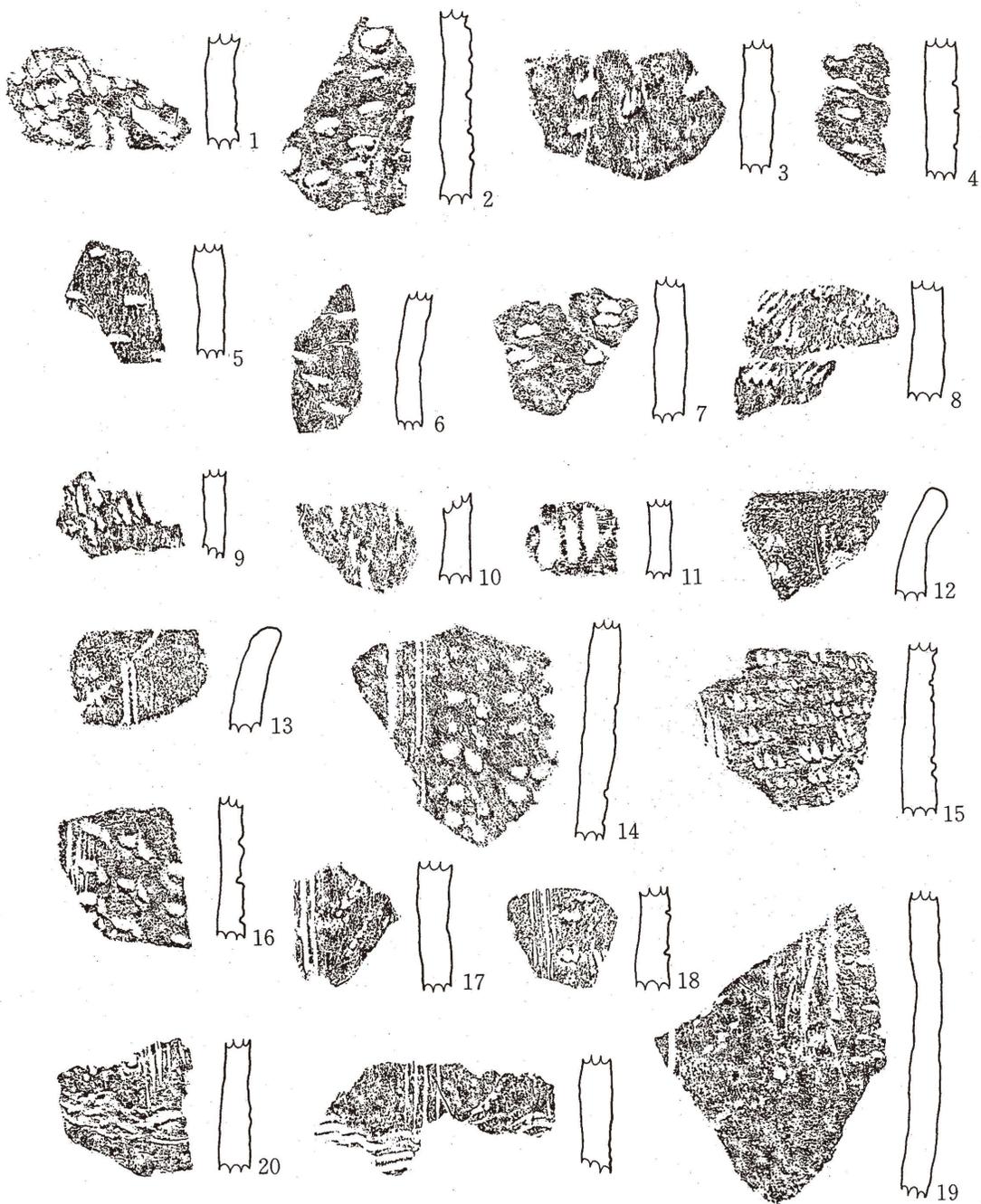
連点条痕文・連点条痕波状文土器（第7図12～19・第8図1～6、図版7・図版8）

前年度文様構成が不明瞭であった土器群で、今回の調査でやや明らかになってきた。第Ⅱトレンチで数点出土し、他は第Ⅴトレンチより出土した。これらの土器は、連点文を区画するように一定間隔で縦位に貝殻状あるいは櫛状工具で条痕が施されるという特徴をもつ。さらに、その下位に横走する波状文をもつものもあるが、この土器群全体に及ぶかは不明である。焼成は一般にやや不良でもろく、胎土に砂粒を多く含む。

第7図12～16・18は前述連点文土器と同様手法で連点を施文し、ただ条痕の有無で分類したので、あるいは重複している可能性もある。第7図17・19～21、第8図1は、3cm前後の間隔をおいて縦位に条痕を施し、その間に4～5点を1単位とした左下りの斜位連点文を施したもので、その下位にみられる波状文同様貝殻を施文具としているようである。前年度出土の羽状連点文土器とも何らかの関連がありそうである。第8図2～4はこれらの一部と同一個体である可能性が強く、そうであれば波状文は複数帯施されていることになる。第8図5・6は文様の展開がいま一つ判然としないが、それぞれ波状文の上位に刺突文を施すもので、共に貝殻を

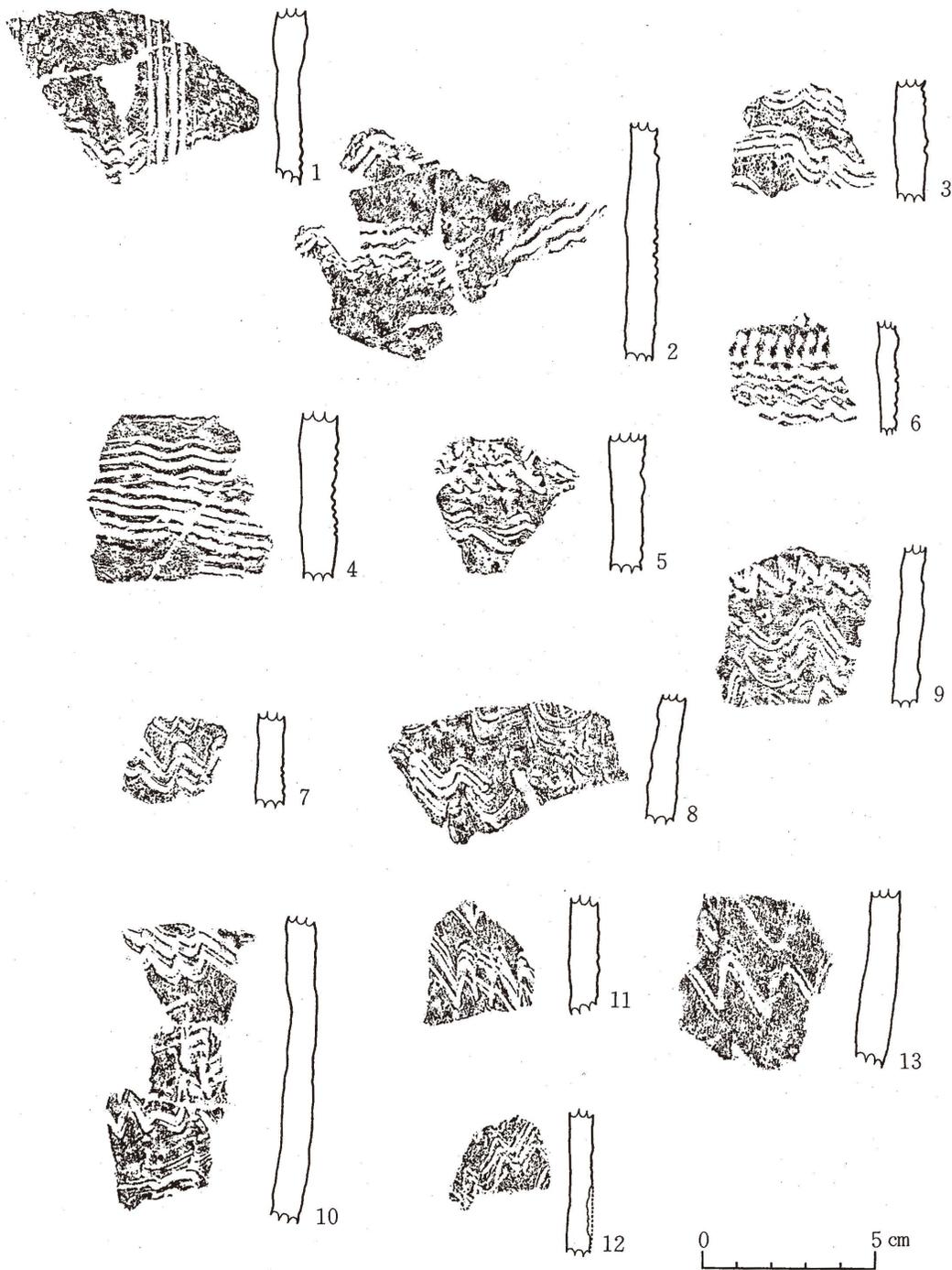


オ6図 下層出土の土器 (No. 3)

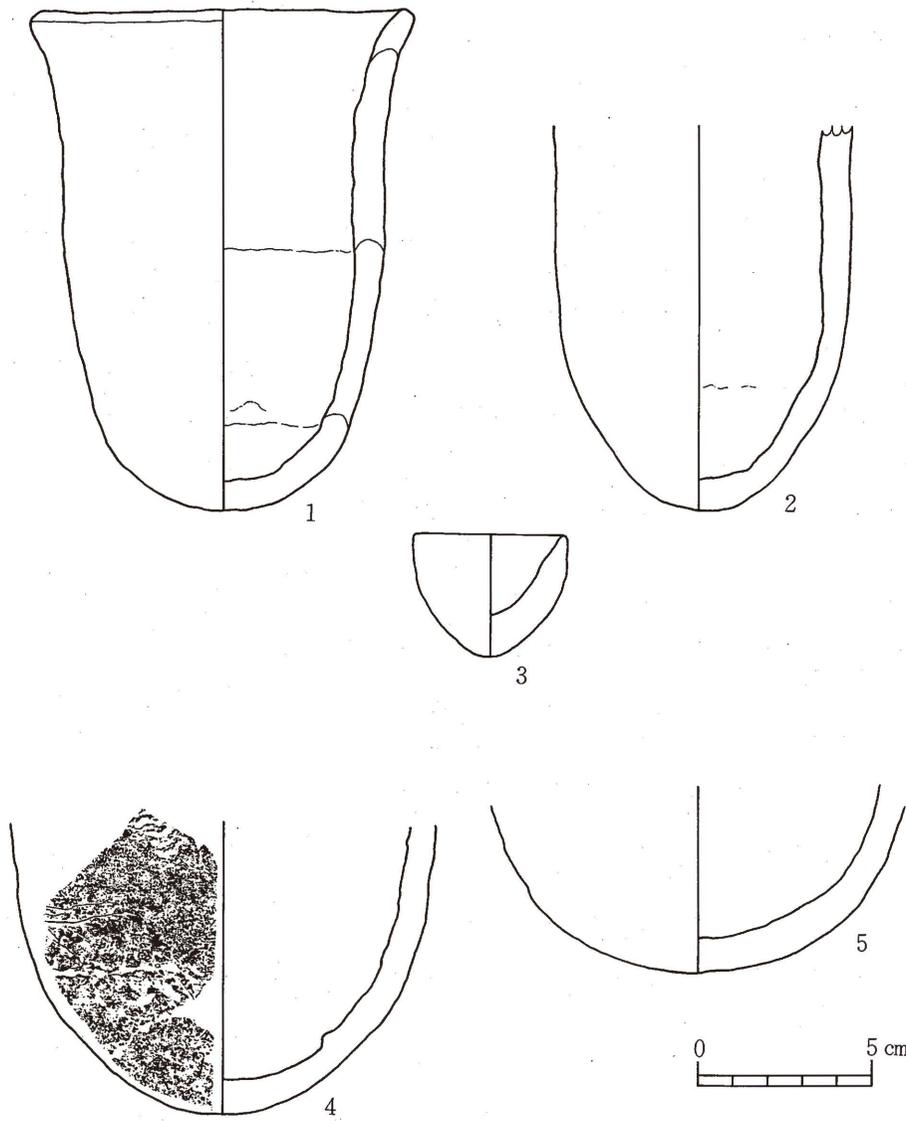


オ7図 下層出土の土器 (No. 4)

0 5 cm



オ8図 下層出土の土器 (No.5)



オ9図 下層出土の土器 (No. 6)

施文工具とするようであるが、6には内部に細い条痕がみられる。

波状文土器（第8図7～12，図版8）

第Ⅴトレンチから検出されたもので、前述の波状文とやや異なるためここに一括した。貝殻を施文具として横位に波状文を施したとみられるもの(第8図7・8・13)、貝殻およびへら状工具を施文具として同様波状文を施したとみられるもの(第8図9・10)、櫛状施文具で波状文を施したもの(第8図11・12)等がみられる。砂粒を多く含みもろいのは他の土器群と同様である。小破片のため、これら波状文の上位あるいは下位に他の文様が存在するかどうかは不明である。

無文土器及び底部（第9図，図版8・9）

第9図2～5は第Ⅴトレンチから検出されたもので、焼成や色調等から前述下層土器時期のものと判断される。丸底のみであるところから、どの土器群につくかは明らかでないにしても下層土器は丸底の土器であろうことが推測される。3のような小形土器は珍しいものであろう。第9図1は、第Ⅳトレンチ4層出土の完形に復元できるもので、長胴丸底の無文土器である。横転して検出され、内部に磨製石斧2点が重なって出土している。この4層からは、他にも少量の土器片が出土しているが、特徴あるものを見出せない。しかし、胴部片外面には前述のブツブツした状態を示すものが見られ、またこの完形土器の器形自体から判断して一応下層土器群の中に入れておく。色調は赭褐色、砂粒を含み焼成はあまり良好でない。輪積みの痕跡が認められる。

爪形文土器（第10図，図版9）

中甫洞穴調査の端緒となった土器であるが、今回は第Ⅱトレンチ4層最下部で微細片1点が出土したにすぎない。爪形文は認められないが、器壁の薄さ、焼成の良さ等から爪形文の破片であることは間違いない。参考として、岸田善光氏が採集され岸田和夫氏が保管しておられた小片の拓影及び写真を掲載する。指頭痕は明瞭でないが、爪形文はくっきりと残されている。

石器（図版10・11）

石器については図示する余裕がなかったため、図版に加えて簡単に説明し、後日報告する。なお石材の鑑定は、鹿児島大学附属小学校旭 慶男教諭にお願いした。

磨製石斧（図版10上）

6点出土しているが、そのうち4点は第Ⅳトレンチ4層出土であり、小形の2点が第Ⅱトレンチ4層出土のものである。1～4・6は砂岩、5は粘板岩製のものでいずれも欠損し完形を保つものはない。3・4は第9図1の土器に内蔵されたような状況で出土したものである。

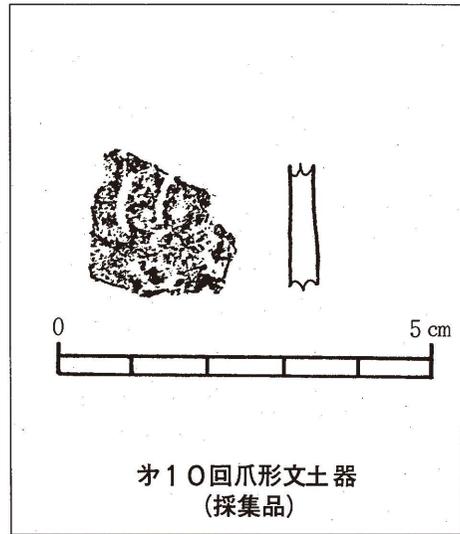
磨石（図版10下・11上）

磨石15点のうち14点は第Ⅴトレンチ出土であり、1点が第Ⅲトレンチから出土している。砂岩、花崗閃緑岩、石英斑岩からなる。第Ⅴトレンチに集中するのが特徴的であり、欠損するものが多い。

その他、砥石あるいは石皿片と思われるもの4点、用途不明石器1点が検出されている。これらは、砂岩、頁岩からなるものである。

むすび

今回の調査では、4カ所にトレンチを入れたが各トレンチとも遺物の発見はあったものの、第Vトレンチを除いて少量にすぎず、種々の問題点は今後に譲ることになった。ただ、第IVトレンチにおける土拵墓の検出と、今回下層土器とした土器群の中に新たな文様構成をもつものを発見したのは大きな成果といえる。今後の課題は、爪形文土器包含層の確認と、下層出土土器群の性格をより明瞭にすることであろう。文化伝播の問題、南島土器成立の問題等この遺跡の出現により再度検討すべき事柄はあまりに多い。



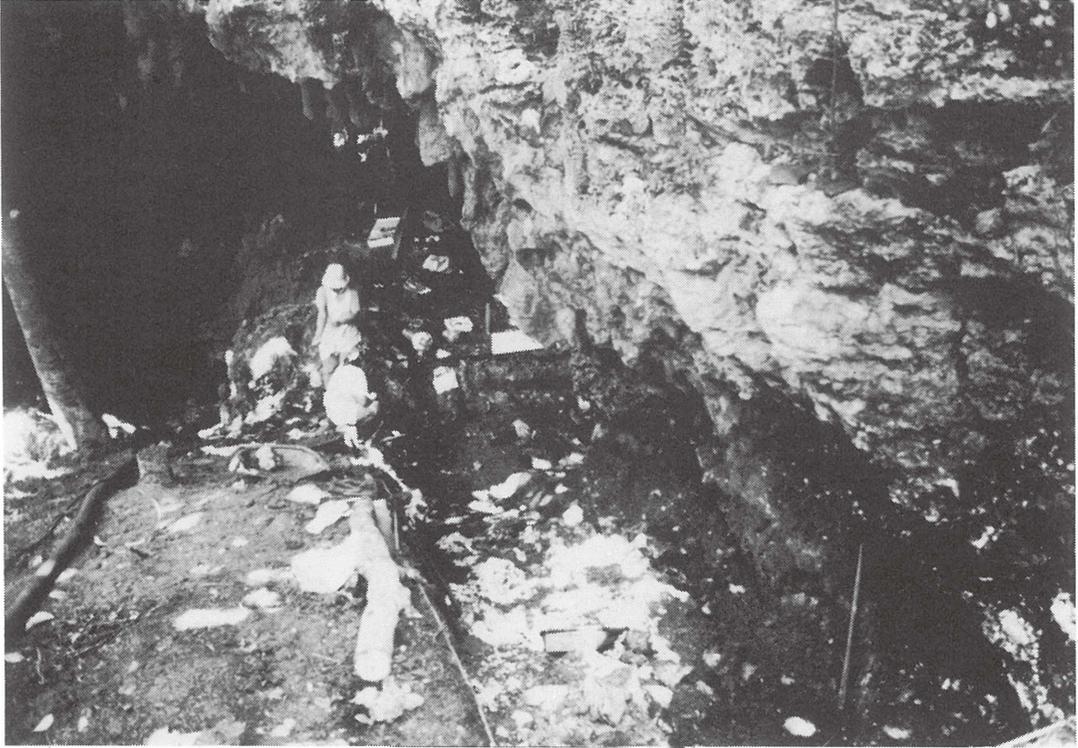


中甫洞穴全景

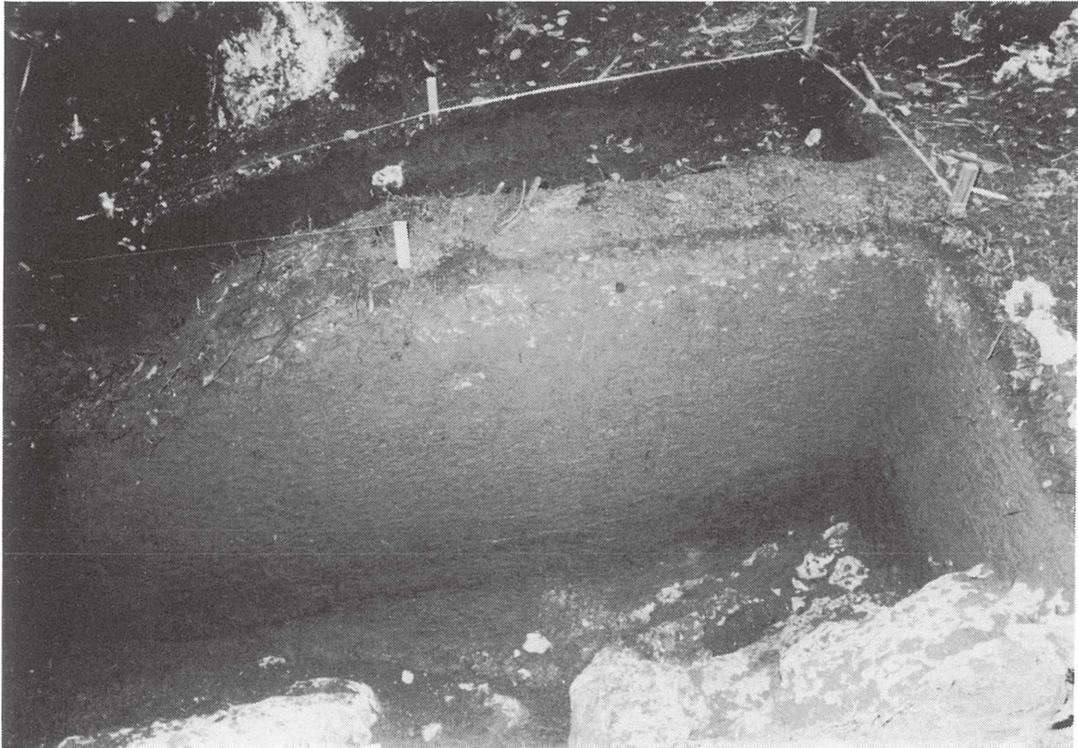


Ⅲトレンチ調査風景

図版 2



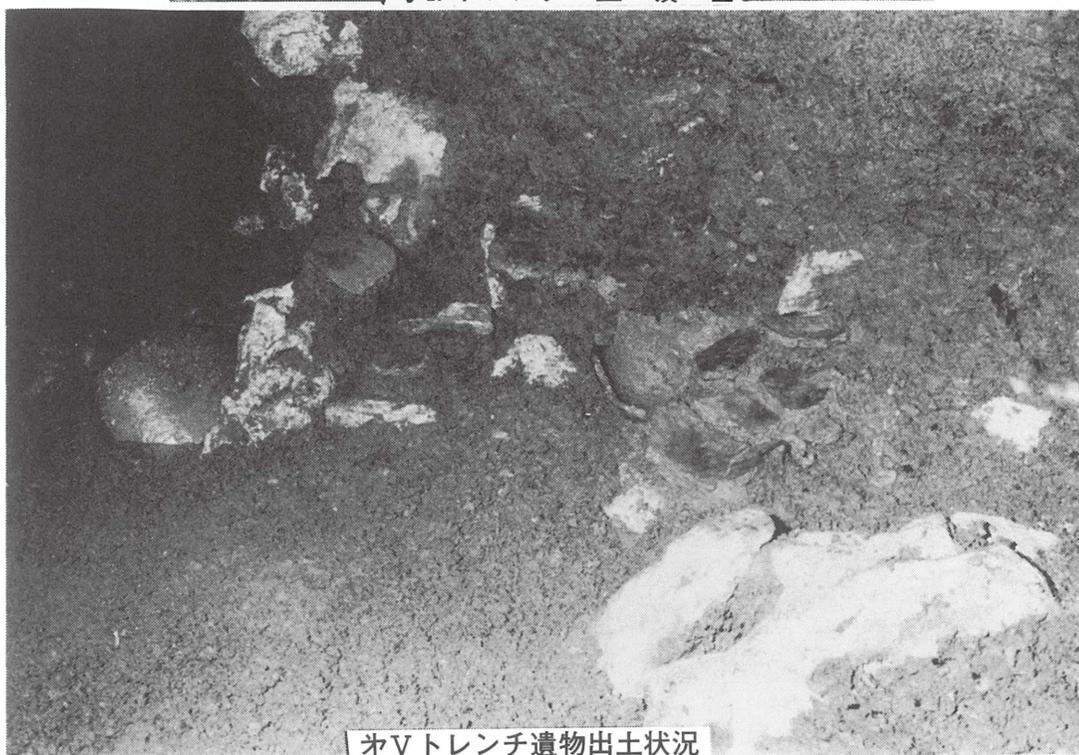
オⅣトレンチ調査風景



オⅢトレンチ東壁地層

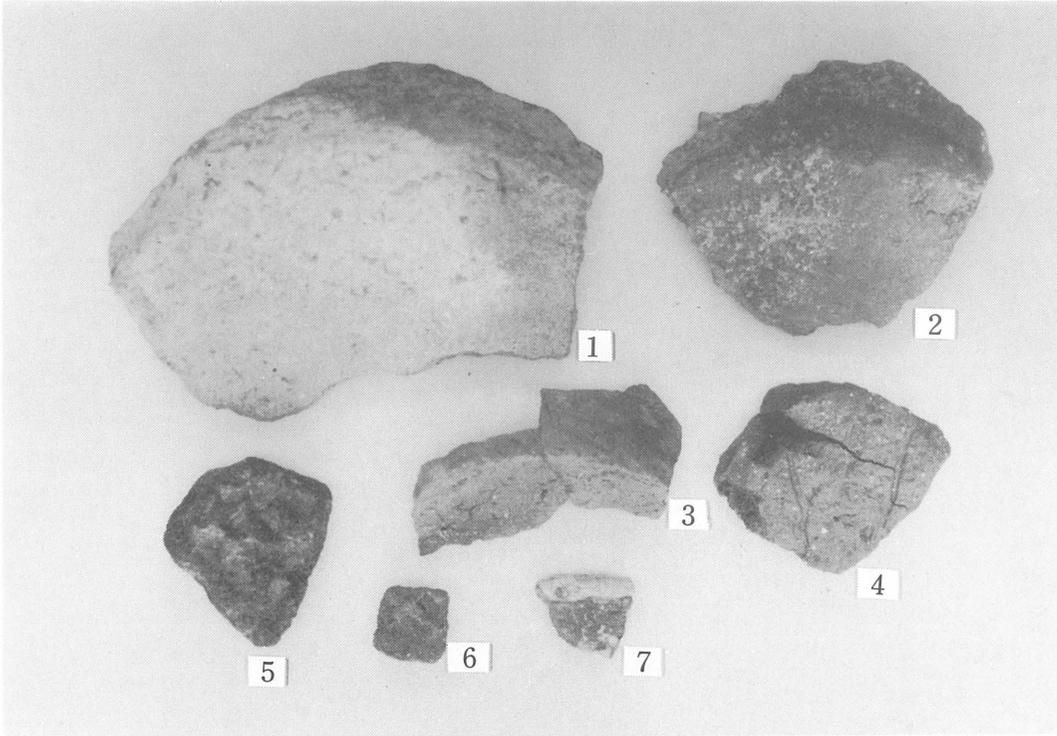


オVトレンチ 土 壙 墓

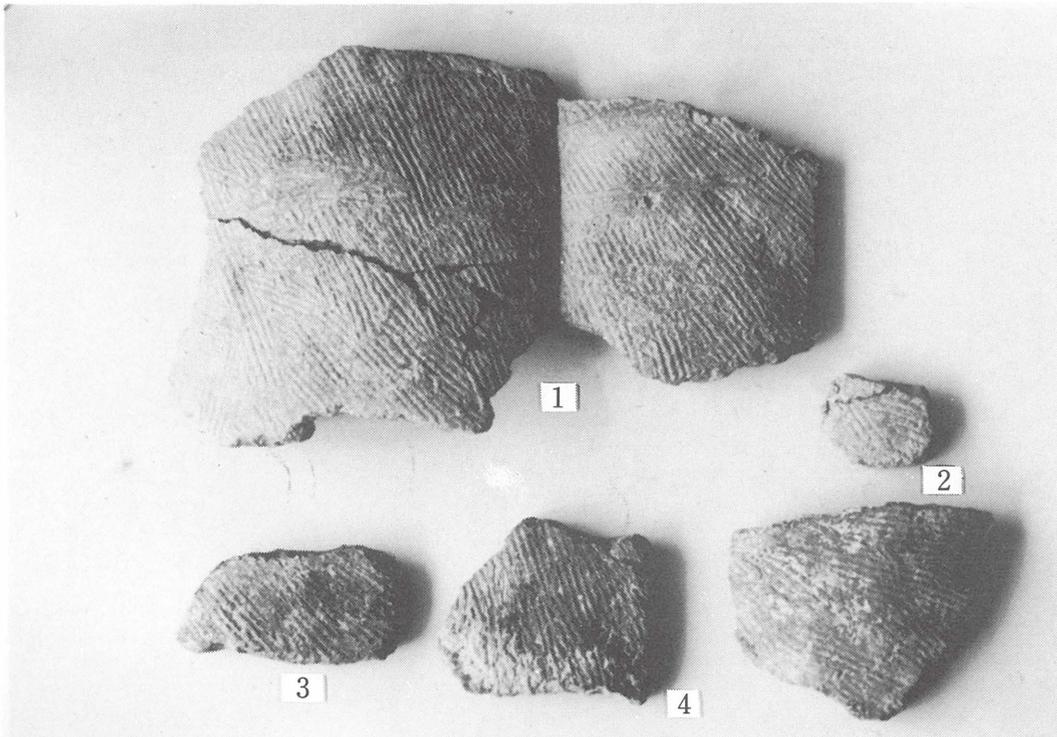


オVトレンチ遺物出土状況

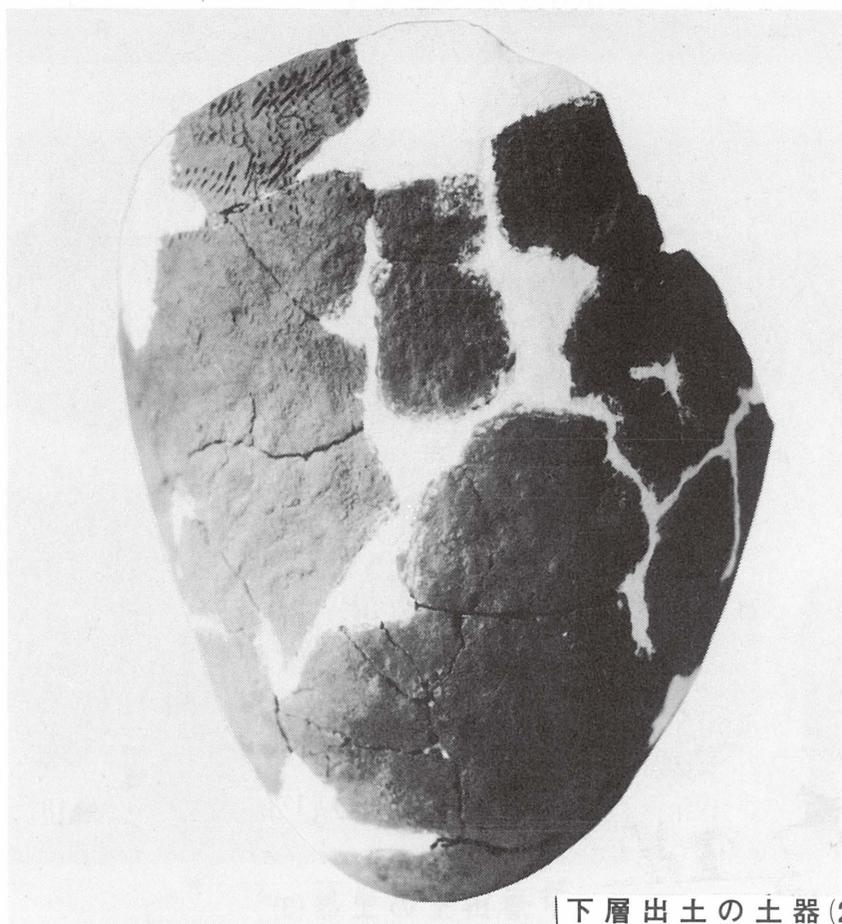
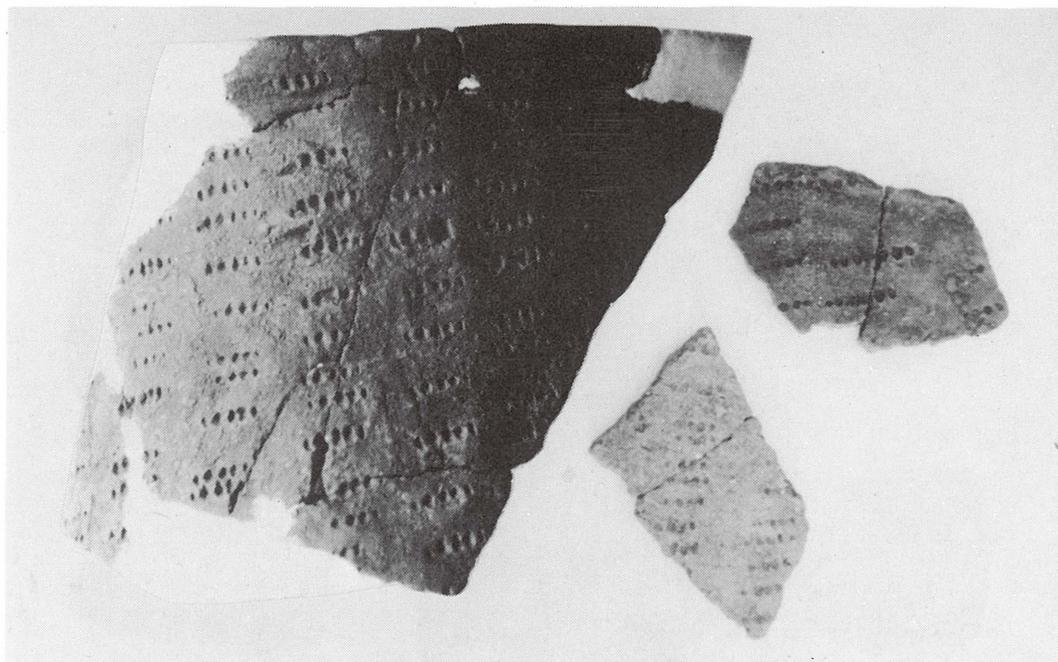
図版4



上層出土の土器

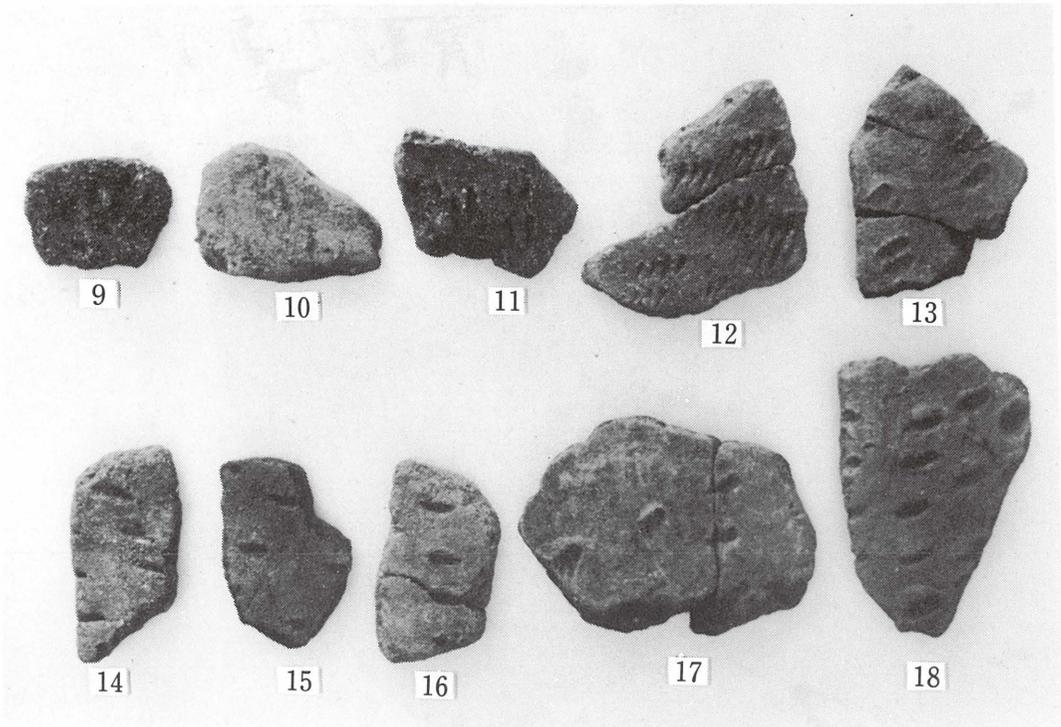
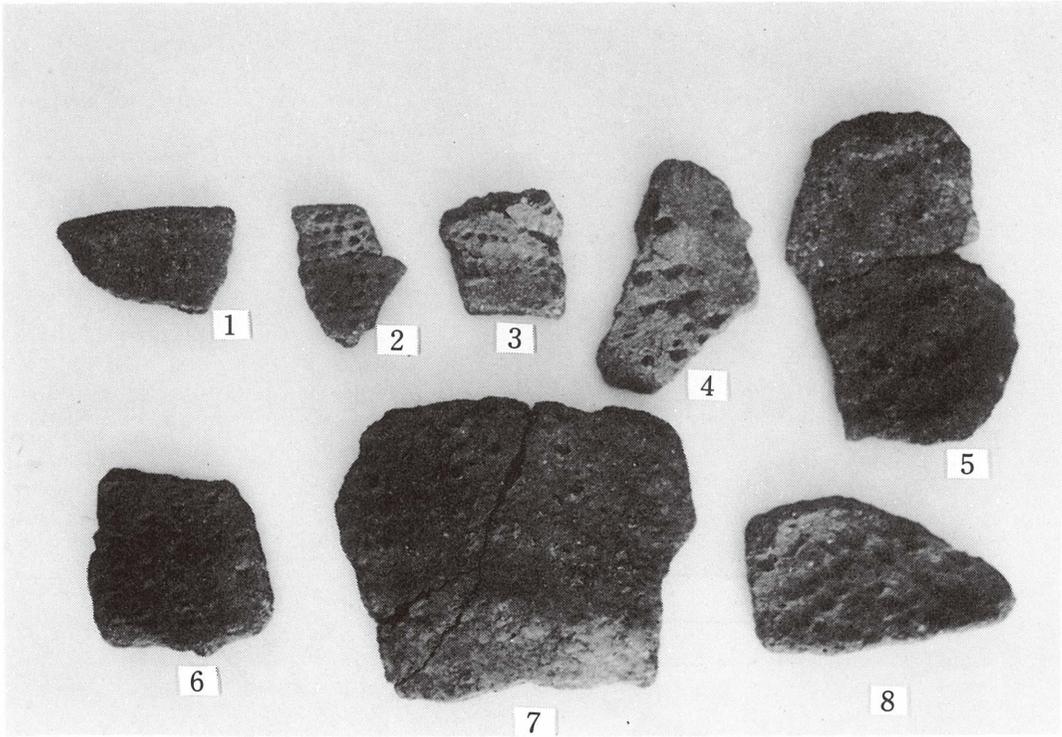


下層出土の土器(1)

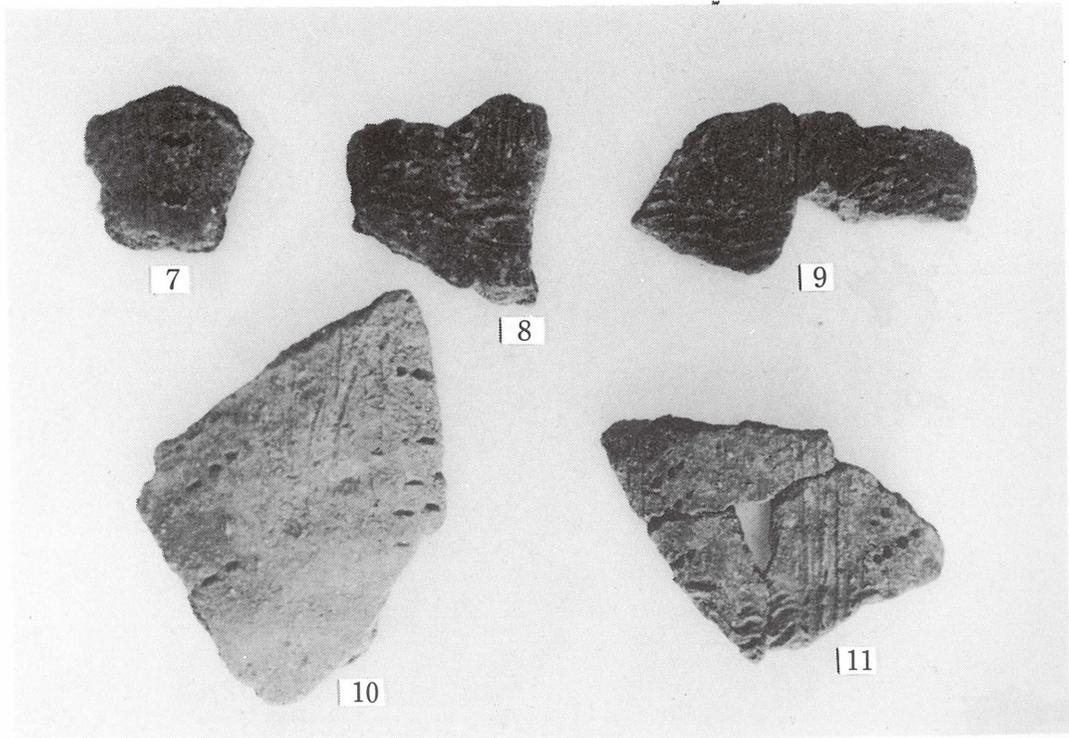
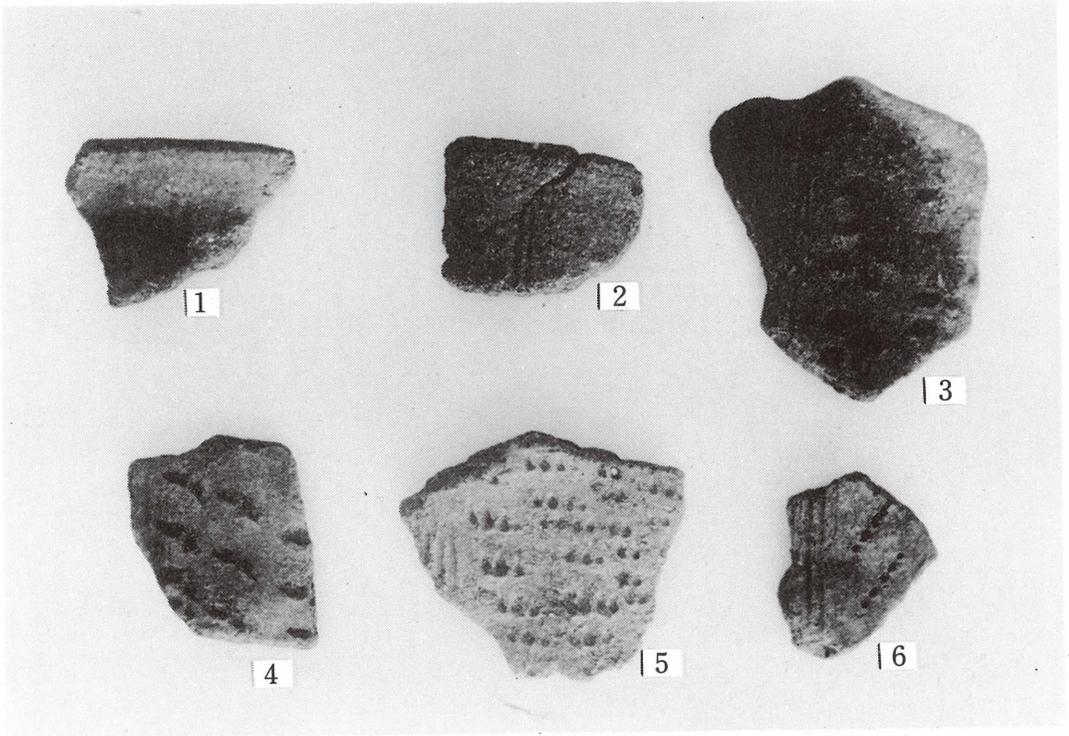


〔下層出土の土器(2)〕

図版6

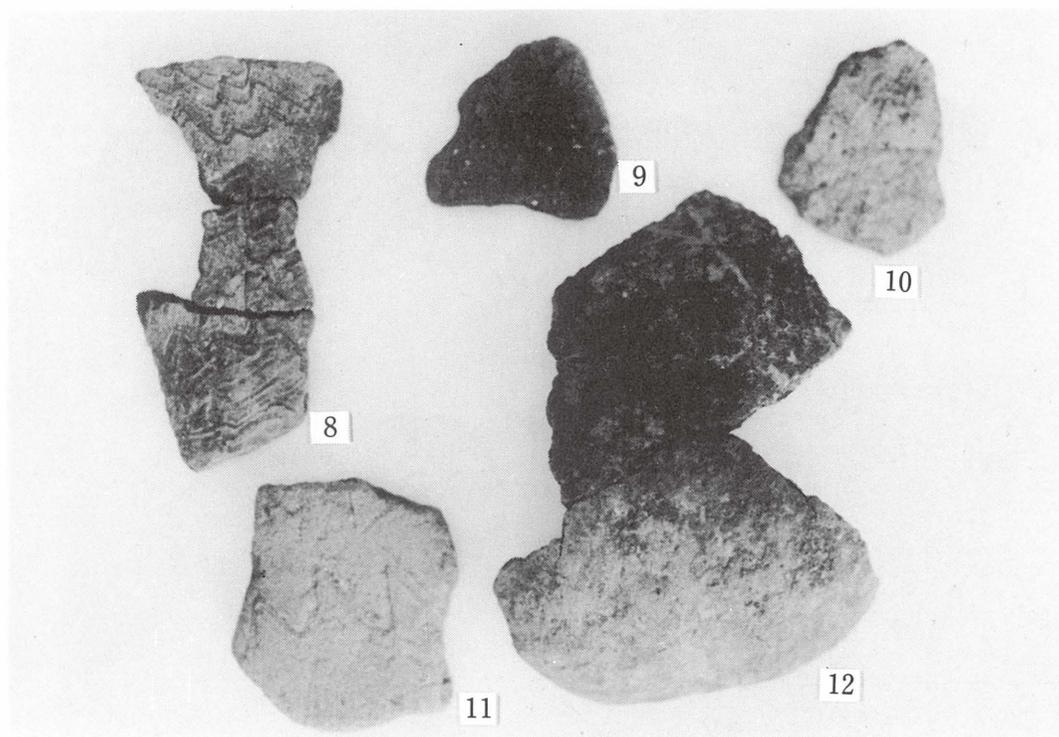
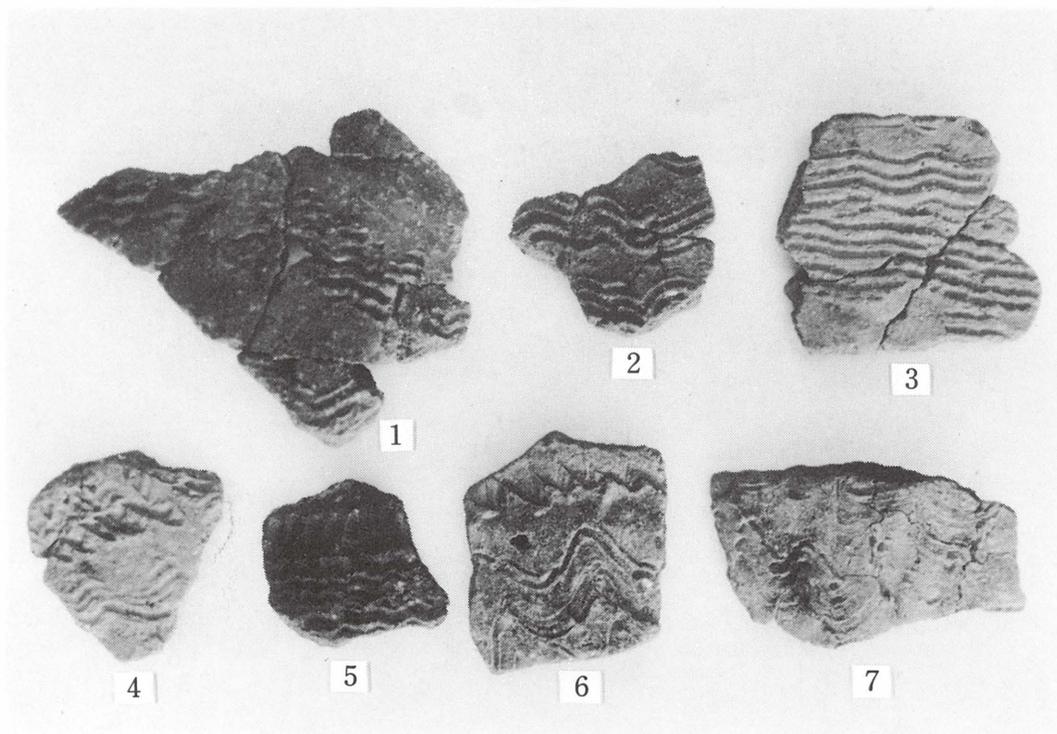


下層出土の土器(3)



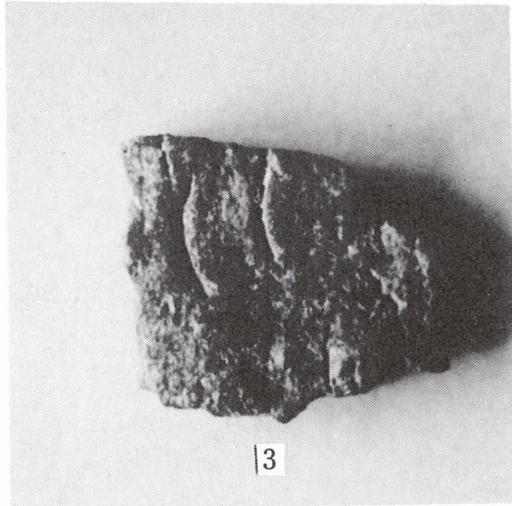
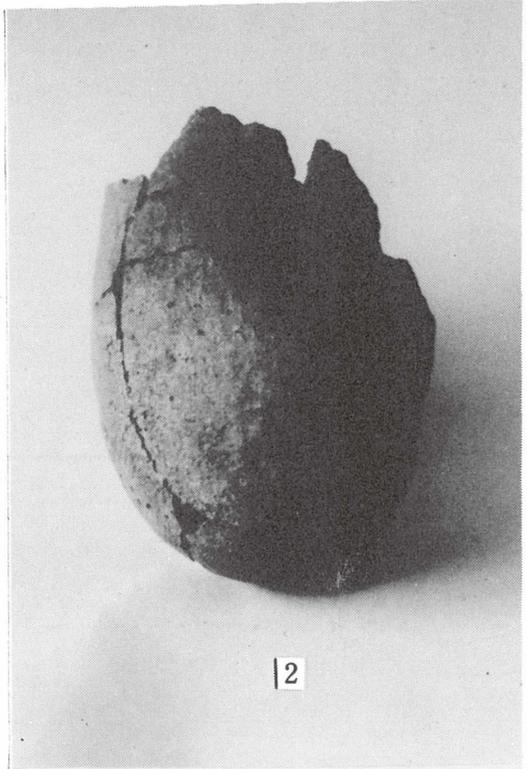
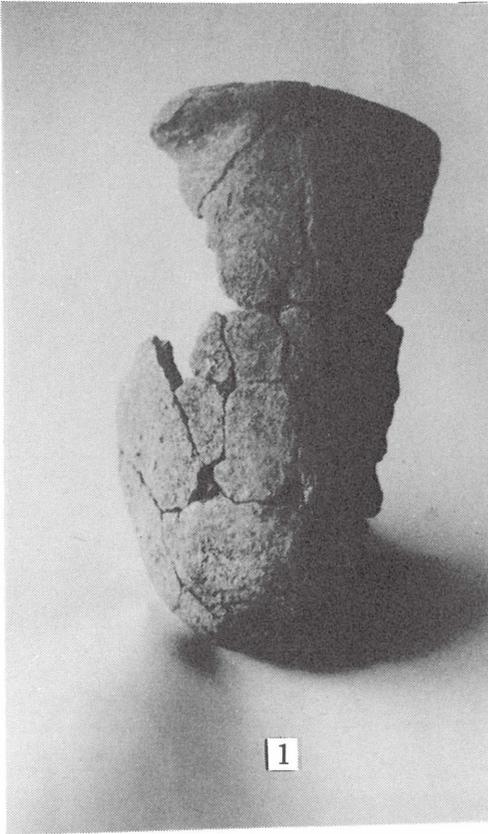
下層出土の土器

図版8



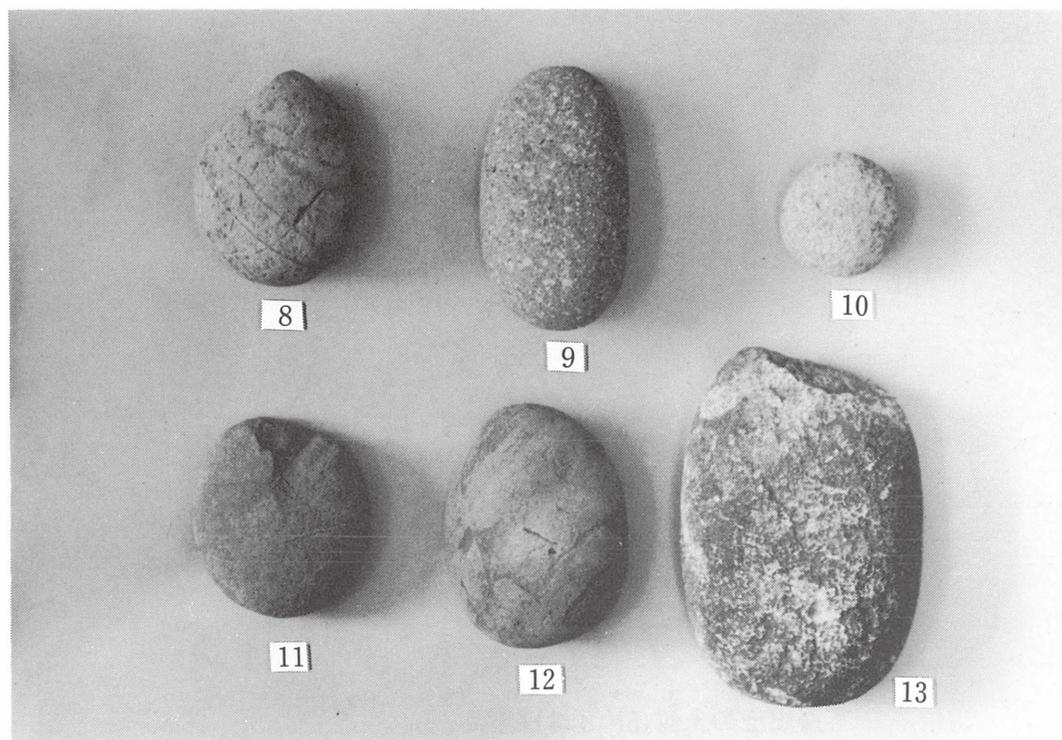
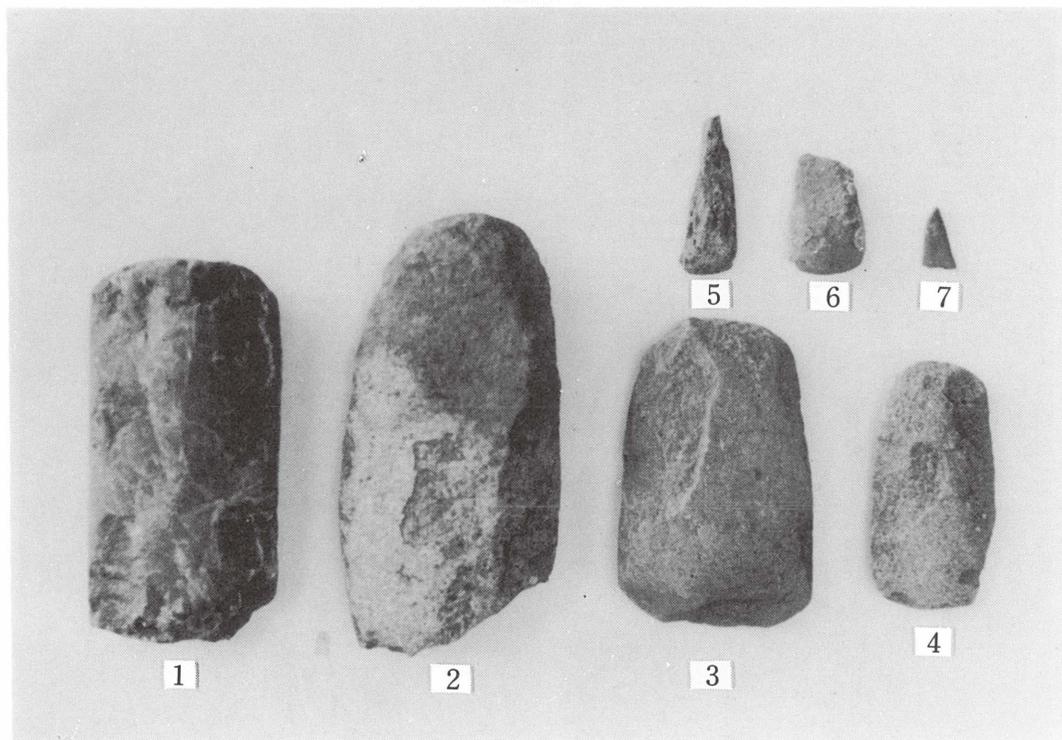
下層出土の土器(5)

図版9



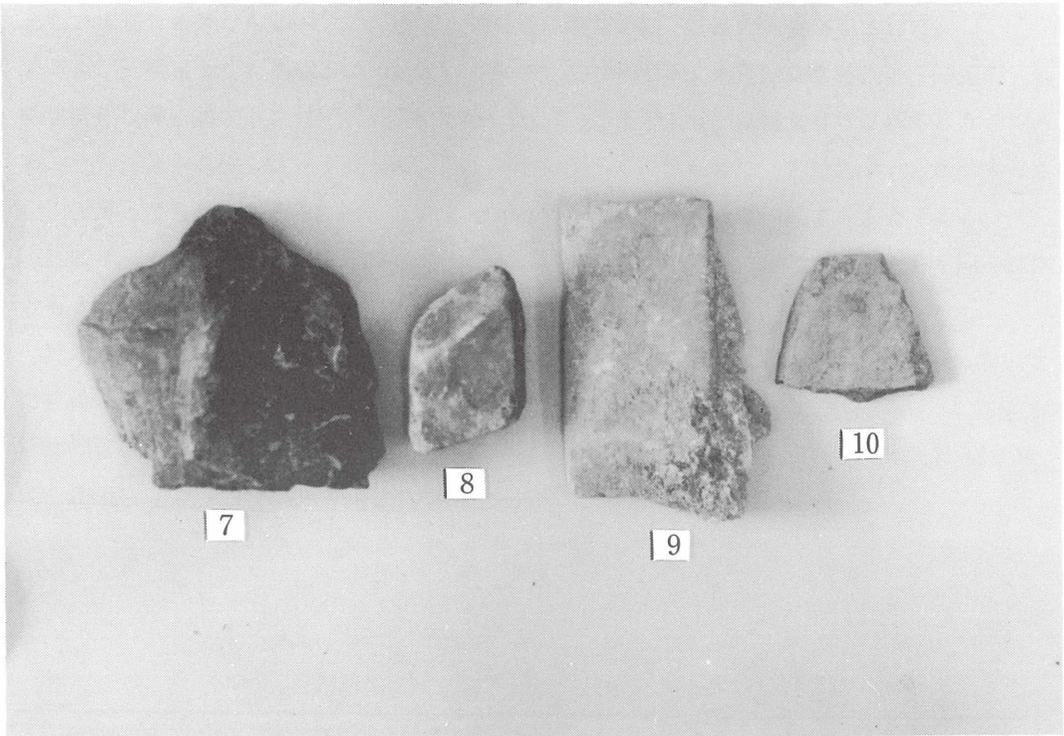
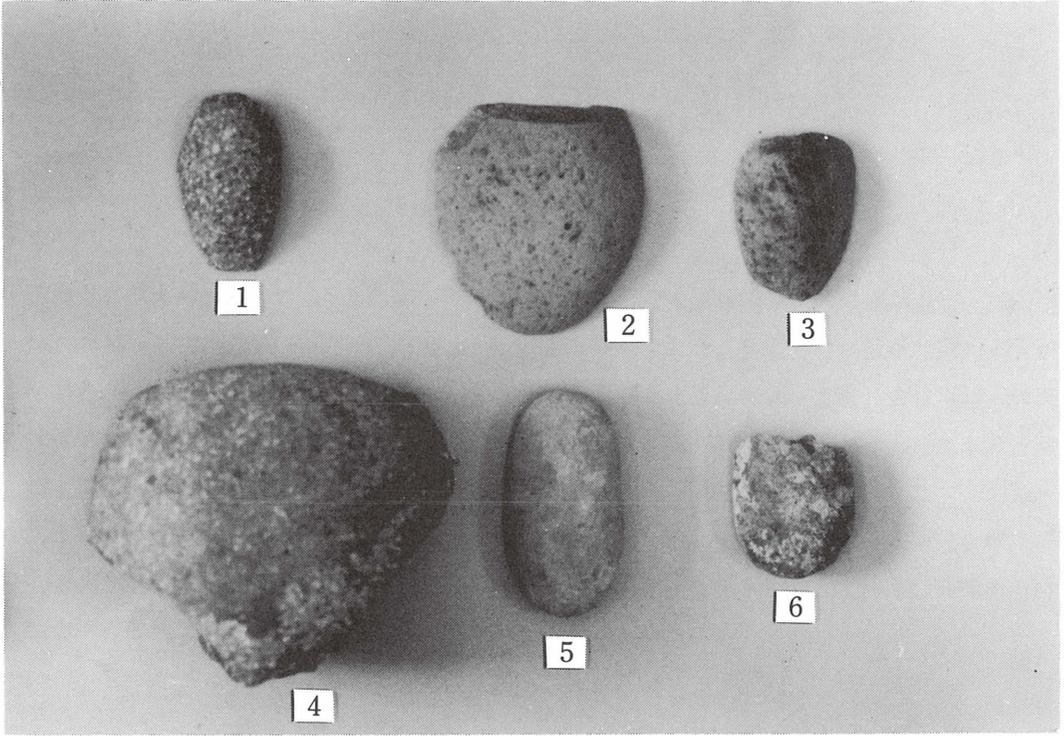
下層出土の土器(6) 3は採集品

图版10



中甫洞穴出土石器(1)

图版 11



中甫洞穴出土石器(2)

鹿児島県知名町(沖永良部島)中甫洞穴出土の人骨

松下 孝幸*

はじめに

鹿児島県大島郡知名町(沖永良部島)水窪663番地に所在する中甫洞穴の発掘調査が、1982年(昭和57年)と翌1983年(昭和58年)に行なわれ、人骨が出土した。1982年には散乱状態の人骨が発掘され、1983年の調査では、1体の埋葬人骨が散乱骨とともに発掘された。これらの人骨群は縄文時代や弥生時代に属するもので、南西諸島の形質人類学研究にとってきわめて貴重な資料となるものである。

長崎大学医学部解剖学第二教室では、南西諸島を含めた南九州地域の人類学的研究を続けているが、本例は保存状態も良好なものであり、観察ならびに計測を行なった結果、興味ある所見が認められたので、その結果を報告したい。

資 料

中甫洞穴から出土した人骨は表1、2に示すとおりで、1982年の調査では2層から人骨が出土し、大腿骨の数から4体分が、また、1983年の調査では、2体の人骨が出土した。

考古学的所見より、1982年に出土した人骨のうち、「頭蓋I」以外は弥生時代に、「頭蓋I」は弥生時代以降に属する人骨で、1983年出土人骨のうち「1号人骨」は縄文時代に属する人骨である。また、「2号人骨」は「1号人骨」の上面から出土した散乱骨で、「1号人骨」を埋葬するさい、攪乱したものか、あるいは「人骨1号」と同じ時代かそれ以降に属する人骨である。

1982年出土人骨のうち、上腕骨A、尺骨A、橈骨A、大腿骨A、脛骨Aはおそらく同一個体と考えられる。

計測方法は、Martin-Saller(1957)によったが、一部はHowells(1973)の方法で計測した。また脛骨の横径は森本(1971)にならい、オリビエの方法で計測を行なった。

比較資料としては、宇宿弥生人(松下、1979)、面縄弥生人(松下、1983)、椎ノ木弥生人(中橋、他、1980)、里村弥生人(小片、他、1983)を用いた。

* Takayuki Matsushita(長崎大学医学部解剖学第二教室)

(Department of Anatomy, Faculty of Medicine, Nagasaki University)

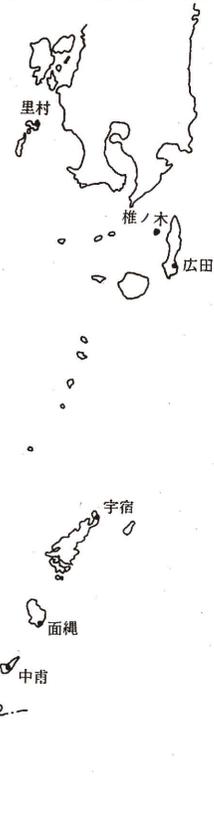
表1 1982年出土人骨

人骨番号	性別	年齢
頭蓋 I	不明	壮年
下顎骨 I	男性	壮年
上腕骨 A	男性	不明
尺骨 A	男性	不明
橈骨 A	男性	不明
寛骨 A	男性	不明
仙骨 A	不明	不明
大腿骨 A	男性	不明
大腿骨 B	女性	不明
大腿骨 C	不明	不明
大腿骨 D	不明	不明
脛骨 A	男性	不明
脛骨 B	不明	不明
脛骨 C	不明	不明
脛骨 D	不明	不明
腓骨 A	男性	不明
腓骨 B	男性	不明

表2 1983年出土人骨

人骨番号	性別	年齢
1号人骨	女性	壮年
2号人骨	男性	不明

図1 遺跡



所見

【1982年出土人骨】

1号人骨（女性、壮年）《縄文時代》

(1) 頭蓋

1. 脳頭蓋

後頭骨の一部を欠損している以外はほぼ完全である。外後頭隆起の発達は弱く、乳様突起も小さい。三主縫合はすべて内外両板とも開離している。外耳道は両側とも観察可能であり、外耳道骨腫は両側とも認められない。

頭蓋最大長は175mm、頭蓋最大幅は131mm、バジオン・プレグマ高は(138mm)で、頭蓋長幅示数は74.86、頭蓋長高示数は(78.86)、頭蓋幅高示数は(105.34)となり、頭型は、dolicho-, hypsi-, akrokran(長、高、尖頭)に属している。頭蓋水平周は496mm、横弧長は310mm、横弧長は365mmで、脳頭蓋の径は小さい。

2. 顔面頭蓋

顔面頭蓋は鼻根部、左側頬骨および上顎骨の頬骨突起を欠損している。眉上弓の隆起はきわめて弱く、前頭結節の発達は良好で、前頭部は膨隆している。鼻根部を欠いているので、この部分の観察はできない。

顔面頭蓋の径も小さく、顔長は(96mm)、顔高は112mm、上顔高は62mmで、頬骨弓幅および中顔幅は計測できないが、中顔幅は右側半が完全なので、正中矢状面までの距離を測り、これを2倍することによって、推定値を算出してみると、〔45×2=90〕となる。これを用いて、ウィルヒョーの顔示数と上顔示数を算出してみると、それぞれ〔128.44〕、〔68.89〕となり、顔面の幅径は小さい。

眼窩幅は40mm(右)、眼窩高は33mm(右)で、眼窩示数は82.50(右)となり、右側は mesokonch (中眼窩)に属している。

鼻高は46mmであるが、鼻幅は計測できない。また、鼻根部については、観察も計測もできない。

側面角は、全側面角が85度、鼻側面角が92度、歯槽側面角は61度で、強い歯槽性の突顎の傾向が認められる。

3. 下顎骨

左側の下顎頭と筋突起の一部および下顎角から下顎枝にかけて欠損している以外はほぼ完全である。径は小さく、下顎枝角は大きい。また、下顎切痕は浅い。

4. 歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯を歯式で示すと次のとおりである。

M ₃ M ₂ M ₁ P ₂ P ₁ C	I ₂ I ₁	I ₁ I ₂ C	P ₁ P ₂ M ₁ M ₂ M ₃
● M ₂ M ₁ P ₂ P ₁ C	I ₂ I ₁	○ I ₂ C	P ₁ P ₂ M ₁ M ₂ M ₃

／	：不明(破損)
○	：歯槽開存
●	：歯槽閉鎖

咬耗度は Broca の 2 度で、咬合形式は鉗子状咬合である。また風習的抜歯は認められない。

(2) 四肢骨

1) 上肢骨

肩甲骨、鎖骨、上腕骨、橈骨および尺骨などが残存していた。

1. 肩甲骨

両側とも肩甲棘や外側角部が残存していた。径は小さい。

2. 鎖骨

右側は肩峰端を、左側は両端を欠損していた。径は著しく小さく、細い。

3. 上腕骨

両側とも上腕骨頭を欠損している。骨体は細いが、扁平である。三角筋粗面の発達が悪くまた左側には滑車上孔が認められる。

計測値は、中央最大径が17mm(右、左)、中央最小径は12mm(右)、13mm(左)で、骨体断面示数は70.59(右)、76.47(左)となり、骨体は扁平である。骨体最小周は48mm(右)、47mm(左)、中央周は50mm(右)、51mm(左)で、骨体は細い。

4. 橈骨

左右ともほぼ完全である。骨体は細く、骨間縁の発達もあまり良いものではない。

5. 尺骨

左右ともほぼ完全である。橈骨と同じように骨体は細く、骨間縁の発達は悪い。

2) 下肢骨

寛骨、大腿骨、脛骨および腓骨などが残存していた。

1. 寛骨

右側は腸骨が、左側は腸骨体が残存していた。大坐骨切痕の観察が可能で、この角度は大きい。

2. 大腿骨

右側は大腿骨頭の一部と内側顆を欠損している以外は良く残存しているが、左側は骨体のみが残存していた。径は小さく、骨体は細い。また粗線の発達もあまり良くなく、骨体の後方への突出も弱い。

骨体中央矢状径は21mm(右)、22mm(左)、骨体中央横径は22mm(右、左)で、骨体中央断面示数は95.45(右)、100.00(左)である。最大長は計測できないが、内側顆の一部を復元して、推定値を求めてみると、〔358mm〕(右)となり、長さは短い。骨体中央周は69mm(右)、70mm(左)で骨体は著しく細く、また上骨体断面示数は76.00(右)、79.17(左)となり、骨体上部はやや扁平である。

3. 脛骨

右側は近位端の一部を、左側は近位端を欠いている。骨体は細く、ヒラメ筋線の発達は悪い。骨体中央位での断面形は左右ともヘリチカのII型を呈している。

中央最大径は22mm(右)、23mm(左)、中央横径は16mm(右、左)で、中央断面示数は72.73(右)69.57(左)となり、左側の骨体はやや扁平である。また骨体周は62mm(右、左)、最小周は56mm(右、左)で、骨体は細い。

4. 腓骨

右側はほぼ完全であるが、左側は両端を欠損していた。骨体は細く、稜形成は弱く、溝も浅い。

(3) 推定身長値

橈骨最大長から、pearson および藤井の公式を用いて推定身長値を算出すると、それぞれ147.08cm(Pearson、右)、146.08cm(Pearson、左)、144.60cm(藤井、右)、144.21cm(藤井、左)となる。また推定右大腿骨最大長から、Pearson および藤井の公式を用いて推定身長値を算出してみると、〔142.48cm〕(Pearson)、〔141.24cm〕(藤井)となり、いずれにせよ低身長である。

(4) 性別・年齢

性別は、眉上弓の隆起がきわめて弱く、前頭結節の発達も良好で、前頭部が膨隆していることや大坐骨切痕の角度が大きいことから、女性と考えられ、年齢は、三主縫合が内外両板とも

開離していることから、壮年と推定される。

2号人骨（男性、年齢不明）《縄文時代以降》

鎖骨、上腕骨、橈骨、尺骨、腓骨、手根骨、中手骨、足根骨、中足骨、手足の指骨、肋骨および椎骨片が残存していた。

(1) 上肢骨

1. 鎖骨

右側は、胸骨端を欠く以外は良く残存していたが、左側は肩峰側1/2が残存していたにすぎない。径は中程度である。

2. 上腕骨

左側は、近位1/3を欠く以外は良く残存していたが、右側は骨体中部と遠位部が残存していたにすぎない。径はやや大きいが、三角筋粗面の発達はあまり良いものではない。また骨体はやや扁平である。

3. 橈骨

左側は骨体が、右側は骨体の中央部が残存していた。骨体の径は大きく、骨間縁の発達は中央部で良好である。

4. 尺骨

左側の遠位半が残存していただだけである。

(2) 下肢骨

1. 腓骨

左側骨体が残存していた。径はやや大きく、溝形成は比較的良好である。

(3) 性別・年齢

四肢骨の諸径がやや大きいことから、男性と推定される。

【1982年出土人骨】

(1) 頭蓋

頭蓋 I 《弥生時代以降》

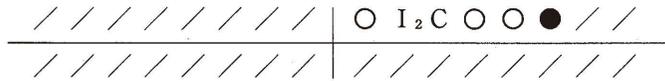
脳頭蓋、左側上顎骨および左側頬骨が残存していた。骨壁は厚く、乳様突起は中程度である。計測は頭蓋最大長が計測できただけで、その計測値は166mmで、長さは短い。頭蓋最大幅は計測できないが、かなり広いようである。頭蓋長幅示数は算出できないが、観察によって頭型を知ることが可能で、頭型は過短頭に属している。また本頭蓋の後頭部はきわめて特異的な形態を示しており、左右の頭頂骨は矢状縫合のほぼ中間位で、直角に下垂し、後頭骨に続いている。従って、後頭骨は後方へ丸いふくらみを形成することなく平坦になっている。

縫合は、矢状縫合とラムダ縫合が観察可能であるが、両者は内外両面とも開離している。

また、外耳道は左右とも観察可能であるが、左右ともに外耳道骨腫は認められない。

眉上弓の隆起は内側にわずかに認められ、前頭部はやや膨隆している。眼窩の幅径はあまり広くないようであるが、角ばった形態を呈しており、また左側上顎骨前頭突起は矢状方向を向いている。

上顎骨歯槽突起には釘植しており、また歯槽の状態の観察が可能である。この部分を歯式で示すと次のとおりである。



歯はやや小さく、咬耗度はBrocaの3度である。



性別は不明であるが、年齢は、縫合が内外面板とも開離していることから、壮年と推定される。

下顎骨 I (男性) 《弥生式時代》

右側半は、下顎角を欠いている以外はほぼ完全であるが、左側は下顎枝が残存していた。下顎体の径はやや大きい、下顎切痕は著しく浅い。また風習の抜歯の痕跡は認められない。径がやや大きいことから、男性の下顎骨と考えられる。

(2) 四肢骨

1) 上肢骨

1. 上腕骨 A (男性) 《弥生時代》

左側骨体の遠位半が残存していた。骨体の径は著しく大きく、骨体は扁平である。

計測値は、中央最大径が27mm(左)、中央最小径が18mm(左)で、骨体断面示数は66.67(左)となり、骨体は著しく扁平である。骨体の径が著しく大きいことから、男性上腕骨と考えられる。

2. 橈骨 A (男性) 《弥生時代》

左側は、近位端を欠く以外はほぼ完全であるが、右側は遠位半が残存していたにすぎない。径は大きく、骨間縁は中央位よりもやや近位で最も突出している。径が大きいことから、男性橈骨と考えられる。

3. 尺骨 A (男性) 《弥生時代》

右側の骨体中央部が残存していたにすぎない。径は著しく大きく、骨間縁はほぼ中央位で最も突出してしている。径が大きいことから、男性橈骨と考えられる。

2) 下肢骨

1. 大腿骨 A (男性) 《弥生時代》

遠位端を欠いてはいるが、その他はほぼ完全なものをAとした。骨体の径はやや大きく、粗線の発達は良好で、骨体も後方へ突出している。

計測値は、骨体中央矢状径が31mm(左)、骨体中央横径は25mm(左)で、骨体断面示数は124.00

(左)となり、骨体はやや柱状を呈している。骨体中央周は88mm(左)で、上骨体断面示数は82.76(左)となり、骨体上部の扁平性は弱い。

骨体の径が大きいことから、男性大腿骨と考えられる。

2. 大腿骨B (女性) 《弥生時代》

左右の骨体が残存していた。左側の前面は欠けていたが、径はそれほど大きいものではない。骨体の両側面は粗線へ向かってくぼんでいるが、粗線の幅は広く、明瞭である。計測値は、左側の骨体中央横径が26mm(左)で、右側の上骨体断面示数は80.00(右)である。

骨体の径がそれほど大きいものではないことや骨体の形態から、女性大腿骨と推定した。

3. 大腿骨C (性別不明) 《弥生時代》

右側骨体が残存していた。径は中程度で、粗線の発達は悪く、骨体は横広ろの断面形を呈している。

計測値は、骨体中央矢状径が24mm(右)、骨体中央横径は26mm(右)で、骨体断面示数は92.31(右)である。骨体中央周は83mm(右)で、上骨体断面示数は70.97(右)となり、骨体上部は扁平である。

4. 大腿骨D (性別不明) 《弥生時代》

左側は骨体が、右側は骨体の一部が残存していた。骨体の径はあまり大きいものではないが、骨体両側面は後方へ突出しており、柱状を呈している。

計測は、左側骨体の前面が剥落しているので、ほとんど計測できない。計測値は、骨体中央矢状径が26mm(左)である。

5. 脛骨A (男性) 《弥生時代》

両側とも残存していた。右側は、近位端の一部を欠損している以外はほぼ完全であるが、左側は遠位端のみが残存していたにすぎない。骨体の径は大きく、右側の骨体中央位における断面形はへりチカのV型を呈している。

中央最大径は30mm(右)、中央横径は24mm(右)で、中央断面示数は80.00(右)となり、右側骨体には扁平性は認められない。また骨体周は84mm(右)、最小周は76mm(右)である。

骨体の径が大きいことから、男性脛骨と考えられる。

6. 脛骨B (性別不明) 《弥生時代》

右側骨体が残存していた。骨体の径は中程度である。骨体後面には弱い稜線が認められるので、骨体中央位における断面形はへりチカのIV型である。

中央最大径は28mm(右)、中央横径は20mm(右)で、中央断面示数は71.43(右)となり、また骨体周は75mm(右)、最小周は69mm(右)である。

7. 脛骨C (性別不明) 《弥生時代》

左側骨体が残存していた。骨体の径は中程度で、骨間縁は鋭く発達している。骨体中央位における断面形はへりチカのII型である。

中央最大径は25mm(左)、中央横径は21mm(左)で、中央断面示数は84.00(左)となり、骨体の

扁平性は全く認められない。また骨体周は72mm(左)、最小周は70mm(左)である。

8. 脛骨D (性別不明) 《弥生時代》

左側骨体の近位部が残存していた。計測は不可能なものであるが、径はあまり大きくないようである。

9. 腓骨A (男性) 《弥生時代》

左右とも残存していたが、ともに近位1/3を欠損している。径は大きく、稜の発達も良好である。径が大きいことから、男性腓骨と考えられる。

10. 腓骨B (男性) 《弥生時代》

左側の骨体近位半と外顆が残存していた。径は大きく、稜の発達も良好である。以上のことから、男性腓骨と考えられる。

考 察

《縄文時代人骨》

薩南諸島には比較の対称になる縄文人がないので、1号人骨(女性)を、徳之島の面縄弥生人、奄美大島の宇宿弥生人および西北九州弥生人と比較してみた。

(1) 頭 蓋

まず頭蓋であるが、脳頭蓋は表3に示すとおり、頭蓋最大長は比較的西北九州弥生人に近く、最大幅はどの比較資料よりも小さい。頭蓋長幅示数はどの比較資料よりも小さくなり、西北九州弥生人が中頭に、面縄弥生人、宇宿弥生人が短頭あるいは過短頭に属しているのに反し、本例は長頭である。また、バジオン・プレグマ高はどの比較資料よりも大きい。頭蓋水平周、横弧長および正中矢状弧長はいずれも面縄弥生人よりも大きい、宇宿弥生人よりも小さく、西北九州弥生人の平均値に最も近い。

表3 脳頭蓋計測値(女性、mm)

	中甫洞穴	面 縄		宇 宿		西北九州	
	1号人骨	弥 生 人		弥 生 人		弥 生 人	
		(松下)		(松下)		(内藤)	
	M	n	M	n	M	n	M
1. 頭蓋最大長	175	1	165	1	170	15	178.07
8. 頭蓋最大幅	131	1	136	1	149	15	139.27
17. バジオン・プレグマ高 (138)		1	130	1	130	7	128.28
8/1 頭蓋長幅示数	74.86	1	82.42	1	87.65	15	78.23
17/1 頭蓋長高示数	(78.86)	1	78.79	1	76.47	7	71.22
17/8 頭蓋幅高示数	(105.34)	1	95.59	1	87.25	7	92.48
5. 頭蓋底長	(100)	1	95	1	89		—
11. 両 耳 幅	117	1	116	1	132		—
23. 頭蓋水平周	496	1	486	1	506	14	502.14
24. 横 弧 長	310	1	304	1	317	11	309.09
25. 正中矢状弧長	365	1	352	1	368	13	363.08

顔面頭蓋は、表4に示すとおり、中顔幅はどの比較資料よりも小さい。顔高は面縄弥生人および西北九州弥生人よりも大きく、宇宿弥生人の値に一致し、上顔高はどの比較資料とも大差ない。すなわち顔高はやや高いが、上顔高は低く、低上顔傾向が認められる。同時に顔の幅も狭いため、ウィルヒョーの顔示数や上顔示数はどの比較資料よりも大きい値を示している。

歯槽側面角は、面縄弥生人および宇宿弥生人よりも小さく、強い歯槽性の突顎傾向が認められる。

表4 顔面頭蓋計測値(女性、mm)

	中甫洞穴	面 縄		宇 宿		西北九州	
	1号人骨	弥 生 人		弥 生 人		弥 生 人	
		(松下)		(松下)		(内藤)	
	M	n	M	n	M	n	M
40. 顔 長	(96)	1	100	1	93	—	
41. 側 顔 長	69(右)	1	69	1	61	—	
45. 頬骨弓幅	—	—	—	1	(135)	6	130.17
46. 中 顔 幅	(90)	1	98	1	99	11	95.91
47. 顔 高	112	1	96	1	112	9	104.89
48. 上 顔 高	62	1	61	1	63	12	60.92
47/45 顔 示 数(K)	—	—	—	1	(82.96)	6	81.70
48/45 上顔示数(K)	—	—	—	1	(46.67)	6	47.64
47/46 顔 示 数(V)	[124.44]	1	97.96	1	113.13	9	109.50
48/46 上顔示数(V)	[68.89]	1	62.24	1	63.64	11	63.49
51. 眼 窩 幅(左)	40(右)	1	41	1	43	10	41.10
52. 眼 窩 高(左)	33(右)	1	33	1	33	10	31.20
52/51 眼窩示数(左)	82.50(右)	1	80.49	1	76.74	10	75.92
54. 鼻 幅	—	1	29	1	26	12	26.58
55. 鼻 高	46	1	47	1	50	12	46.33
54/55 鼻 示 数	—	1	61.70	1	52.00	12	57.39
72. 全側面角	85	1	76	1	79	10	81.50
73. 鼻側面角	92	1	76	1	82	—	
74. 歯槽側面角	61	1	77	1	69	—	

(2) 四肢骨

1. 上腕骨

表5に示すとおり、中央最大径、中央最小径、中央周および骨体最小周はどの比較資料より

も小さく、骨体の径が著しく小さいことがうかがえる。また骨体断面示数は面繩弥生人および宇宿弥生人よりも小さく、比較的西北九州弥生人に近く、骨体は扁平である。

また骨体の径が小さい傾向は、橈骨および尺骨にもおいても同様である。

表5 上腕骨計測値(女性、右、mm)

	中雨洞穴 1号人骨	面 繩		宇 宿		大 友	
		弥 生 人		弥 生 人		弥 生 人	
		(松下)		(松下)		(松下)	
	M	n	M	n	M	n	M
1. 上腕骨最大長	—	1	271	1	263	5	270.20
5. 中央最大径	17	1	21	1	18	25	21.68
6. 中央最小径	12	1	16	1	15	25	15.48
7. 骨体最小周	48	1	57	1	50	20	57.65
7(a). 中 央 周	50	1	63	1	54	23	61.96
6/5 骨体断面示数	70.59	1	76.19	1	83.33	25	71.53
7/1 長厚示数	—	1	21.03	1	19.01	5	21.18

2. 大腿骨

表6に示すとおり、最大長はどの比較資料よりも著しく小さい。骨体中央矢状径は大友弥生人より著しく小さく、比較的面繩弥生人および宇宿弥生人に近い。骨体中央横径は宇宿弥生人および大友弥生人より小さく、面繩弥生人に近い。骨体中央断面示数は面繩弥生人や大友弥生人より小さく、比較的宇宿弥生人に近い。また、上骨体断面示数は宇宿弥生人よりも大きく、面繩弥生人および大友弥生人に近く、骨体上部はやや扁平である。すなわち、本例は骨体の径が小さく、柱状性も認められないが、骨体上部はやや扁平である。

表6 大腿骨主要計測値(女性、右、mm)

	中雨洞穴 1号人骨	面 繩		宇 宿		大 友	
		弥 生 人		弥 生 人		弥 生 人	
		(松下)		(松下)		(松下)	
	M	n	M	n	M	n	M
1. 最 大 長	(358)	1	372	1	370	2	391.50
6. 骨体中央矢状径	21	1	23	1	22	30	26.00
7. 骨体中央横径	22	1	23	1	24	30	25.03
8. 骨体中央周	69	1	73	1	71	28	80.32
9. 骨体上矢状径	25	1	28	1	28	32	29.06
10. 骨体上横径	19	1	21	1	20	32	22.75
8/2 長厚示数	(19.33)	1	19.73	1	19.29	2	20.33
6/7 骨体中央断面示数	95.45	1	100.00	1	91.67	30	104.05
10/9 骨体上断面示数	76.00	1	75.00	1	71.43	32	78.42

3. 脛骨

表7に示すとおり、中央最大径、中央横径、骨体周および最小周は比較資料のいずれよりも小さい。中央断面示数は面縄弥生人および宇宿弥生人よりも小さく、比較的大友弥生人に近い。すなわち、面縄弥生人も宇宿弥生人も、脛骨の径は大友弥生人よりも著しく小さいが、本例はこれよりも小さく、骨体は面縄弥生人よりはやや扁平であり、この点は大友弥生人に近似している。

表7 脛骨計測値(女性、右、mm)

	中甫洞穴 1号人骨	面 縄 弥 生 人 (松下)		宇 宿 弥 生 人 (松下)		大 友 弥 生 人 (松下)	
		M	n	M	n	M	n
		1. 脛骨全長	—	1	312	1	309
1a. 脛骨最大長	—	1	319	1	316	3	323.00
8. 中央最大径	22	1	24	1	23	27	27.26
8a. 栄養孔位最大径	26	1	28	1	27	25	30.56
9. 中央横径	16	1	19	1	18	29	19.48
9a. 栄養孔位横径	18	1	20	1	20	25	21.12
10. 骨体周	62	1	68	1	65	27	74.74
10a. 栄養孔位周	70	1	78	1	73	24	82.13
10b. 最小周	56	1	65	1	61	23	68.17
9/8 中央断面示数	72.73	1	79.17	1	78.26	27	71.79
9a/8a 栄養孔位断面示数	69.23	1	71.43	1	74.07	25	69.24
10b/1 長厚示数	—	1	20.83	1	19.74	2	21.86

(3) 推定身長値

右大腿骨から、Pearsonおよび藤井の公式を用いて算出した推定身長値を比較してみた。表8に示すとおり、推定身長値はどの比較資料よりも小さい。大友弥生人も西北九州弥生人も低身長であるが、面縄弥生人や宇宿弥生人はこれらよりもより低身長であり、本縄文人も著しく低身長と推定される。

表8 推定身長値(女性、cm、右大腿骨より、)

	中甫洞穴 1号人骨	面 縄 弥 生 人 (松下)		宇 宿 弥 生 人 (松下)		大 友 弥 生 人 (松下)		西北九州 弥 生 人 (松下)	
		M	n	M	n	M	n	M	n
		Pearsonの公式	[141.21]	1	145.20	1	144.81	5	148.08(左)
藤井の公式	[142.24]	1	144.37	1	143.92	5	147.96(左)	—	—

《弥生時代人骨》

男性の四肢骨だけを椎ノ木弥生人(中橋、他、1980)、里村弥生人(小片、他、1983)および大友弥生人と比較してみた。

1. 上腕骨

表9に示すとおり、中央最大径は椎ノ木弥生人および大友弥生人よりも大きく、中央最小径は椎ノ木弥生人よりも小さく、大友弥生人と大差ない。また骨体断面示数は椎ノ木弥生人および大友弥生人よりも著しく小さい。すなわち、骨体は著しく大きく、骨体には強い扁平性が認められるのである。

表9 上腕骨計測値(男性、右、mm)

	中甫洞穴 A	椎ノ木 弥生人 (中橋、他)		大友 弥生人 (松下)	
		M	n	M	n
1. 上腕骨最大長	—	1	286	9	294.33
5. 中央最大径	27 (左)	1	24	37	24.46
6. 中央最小径	18 (左)	1	20	37	17.97
6/5 骨体断面示数	66.67(左)	1	83.3	37	73.60

2. 大腿骨

表10に示すとおり、骨体中央矢状径は大友弥生人の平均値よりも大きく、里村弥生人B個体に近く、骨体中央横径は大友弥生人や里村弥生人C個体に近い。骨体中央周は里村弥生人A個体やB個体よりは小さいが、里村弥生人C個体や大友弥生人と大差ないものである。また骨体中央断面示数は比較資料のいずれよりも大きい、この中では里村弥生人B個体に最も近く、骨体には柱状性が認められる。上骨体断面示数は大友弥生人に近く、骨体上部の扁平性は弱い。

表10 大腿骨主要計測値(男性、右、mm)

	中甫洞穴 A	里村 弥生人 (小片、他)			大友 弥生人 (松下)	
		A	B	C	n	M
6. 骨体中央矢状径	31 (左)	33	32 (左)	29	41	28.85
7. 骨体中央横径	25 (左)	28.5	26.5(左)	26	41	26.07
8. 骨体中央周	88 (左)	99	94 (左)	87	41	87.22
9. 骨体上矢状径	29 (左)	—	32.5(左)	—	42	30.62
10. 骨体上横径	24 (左)	—	25.5(左)	—	42	24.83
6/7 骨体中央断面示数	124.00(左)	115.8	120.7(左)	115.5	41	111.72
10/9 骨体上断面示数	82.76(左)	—	78.5(左)	—	42	81.34

3. 脛骨

表11に示すとおり、中央最大径は里村弥生人より小さく、大友弥生人に近く、中央横径は里村弥生人の第2破片や大友弥生人に近い。骨体周は里村弥生人より小さく、大友弥生人よりわずかに大きく、最小周は大友弥生人に近い。中央断面示数は里村弥生人および大友弥生人よりも大きく、扁平性は認められない。

表11 脛骨計測値（男性、右、mm）

	中甫洞穴 A	里 村		大 友	
		弥 生 人		弥 生 人	
		第1破片	第2破片	n	M
1b. 脛骨長	330	—	—	—	—
8. 中央最大径	30	35	34	35	31.26
8a. 栄養孔位最大径	35	—	—	30	34.63
9. 中央横径	24	25.5	21	38	21.29
9a. 栄養孔位横径	25	—	—	32	23.22
10. 骨体周	84	95	91	34	82.85
10a. 栄養孔位周	95	—	—	30	92.00
10b. 最小周	76	—	—	34	75.35
9/8 中央断面示数	80.00	72.9	61.8	34	68.03
9a/8a 栄養孔位断面示数	71.43	—	—	30	67.16

総 括

鹿児島県大島郡知名町(沖永良部島)水窪に所在する中甫洞穴の1982年(昭和57年)と翌1983年(昭和58年)の発掘調査によって、人骨が発掘された。これらの人骨は、縄文時代あるいは弥生時代などに属する人骨で、南西諸島の形質人類学の研究にとっては、貴重な資料となるものである。人骨や観察や計測を行ない、周辺地域の資料との比較検討を行なった。その結果は次のように要約することができる。

1. 出土した人骨のうち、縄文時代人骨は1体、弥生時代人骨は大腿骨の数から4体、また縄文時代以降と考えられるものと弥生時代以降と推定されるものが、それぞれ1体ずつ存在する。
2. 縄文時代人骨は、女性壮年骨で、頭蓋長幅示数は74.86となり、頭型は長頭型であり、バジオン・ブレグマ高は高い。顔高は112mm、上顔高は62mmで、頬骨弓幅および中顔幅は計測できないが、顔面の幅径は小さいようである。

眼窩幅は40mm(右)、眼窩高は33mm(右)で、眼窩示数は82.50(右)となり、鼻高は46mmである。また、鼻根部については、観察も計測もできない。

側面角は、全側面角が85度、鼻側面角が92度、齒槽側面角は61度で、強い齒槽性の突顎の傾向が認められる。また、風習的抜歯は認められない。

3. 四肢骨は上肢骨も下肢骨も一様に短くて細く、筋付着部の発達も悪いが、上腕骨は扁平である。
4. 推定身長値は、橈骨最大長から、147.08cm (Pearson、右)、推定右大腿骨最大長からは、(142.48cm)(Pearson)と推定され、いずれにせよ低身長である。
5. 弥生時代男性人骨の四肢骨は大きく、筋付着部の発達も良好で、上腕骨は著しく扁平で、大腿骨には柱状性が認められる。
6. 以上のように、本縄文人は薩南諸島の面縄弥生人や宇宿弥生人と同様に諸径が小さく、筋付着部の発達も悪いものであった。しかし、両弥生人が強い短頭性を示すのに反し、本縄文人の頭型は長頭型で、また上腕骨や脛骨はやや扁平であった。

面縄貝塚や宇宿貝塚では、男性人骨が出土しなかったので、今まで、この地方の男性の弥生時代人の特徴を把握することができなかった。この地方の弥生時代の女性四肢骨の径は著しく小さいが、本遺跡の男性弥生人の四肢骨の径は大きく、九州本土の弥生時代人に比べて、けっして見劣りのするものではない。

薩南諸島を含めた南九州の弥生人は、広田弥生人のように、一般的には、諸径が小さいものと考えられてきたが、小片らは甌島の里村弥生人の中に高身長と推測されるものがあることを指摘しており、事実、この四肢骨の径は大きい。本例の四肢骨の諸径も大きいものであった。このような事実を踏まえて、今後、この地域の弥生人の再検討を行なっていく必要がある。しかし、現状ではあまりにも資料数が少なすぎる。このように南西諸島の形質人類学の新たな課題に答えていくために、今後とも努力を続けていきたい。

《擱筆するにあたり、本研究の機会を与えていただいた、河口貞徳先生、瀬戸口望先生ならびに人骨研究に関してご指導いただいた内藤芳篤教授に感謝致します。》

表12 脳頭蓋計測値 (mm)

	1号人骨 頭蓋 I	
	女 性	性別不明
1. 頭蓋最大長	175	166
8. 頭蓋最大幅	131	—
17. バジオン・プレグマ高 (138)	—	—
8/1 頭蓋長幅示数	74.86	—
17/1 頭蓋長高示数	(78.86)	—
17/8 頭蓋幅高示数	(105.34)	—
5. 頭蓋底長	(100)	—
10 最大前頭幅	115	—
11. 両耳幅	117	—
23. 頭蓋水平周	496	—
24. 横弧長	310	—
25. 正中矢状弧長	365	—
Vertex Rad.	128	—
Nasion Rad.	93	—
Subsp. Rad.	87	—
Prosth. Rad.	96	—

表14 下顎骨計測値 (mm、度)

	1号人骨 下顎 I		
	女 性	男 性	
70. 枝高(右)	58	—	
(左)	—	—	
70(3). 下顎切痕高(右)	12	12	
(左)	—	—	
71. 枝幅(右)	33	33	
(左)	—	—	
71a. 最小枝幅(右)	33	33	
(左)	—	—	
71(1) 下顎切痕幅(右)	(33)	29	
(左)	—	—	
79. 下顎枝角(右)	125	—	
下顎枝角(左)	—	—	
71/70 下顎枝示数(右)	56.90	—	
(左)	—	—	
70(3)/71(1) 下顎切痕示数(右)	(36.36)	41.38	
(左)	—	—	

表13 顔面頭蓋計測値 (mm)

	1号人骨	
	女 性	性
40. 顔長	(96)	
41. 側顔長	69(右)	
42. 下顔長	(99)	
43. 上顔幅	98	
45. 頬骨弓幅	—	
46. 中顔幅	[90]	
47. 顔高	112	
48. 上顔高	62	
47/46 顔示数(V)	[124.44]	
48/46 上顔示数(V)	[68.89]	
51. 眼窩幅(右)	40	
(左)	—	
52. 眼窩高(右)	33	
(左)	—	
52/51 眼窩示数(右)	82.50	
(左)	—	
54. 鼻幅	—	
55. 鼻高	46	
54/55 鼻示数	—	
60. 上顎歯槽長	51	
63. 口蓋幅	36	
64. 口蓋高	13	
64/63 口蓋高示数	36.11	
72. 全側面角	85	
73. 鼻側面角	92	
74. 齒槽側面角	61	

表15 鎖骨計測値 (mm)

	1号人骨		2号人骨
	女 性		男 性
	右	左	右
2. 骨体彎曲高	9	—	—
2a. 骨体彎曲高	24	—	—
3. 骨体彎曲弦長	84	—	—
4. 中央垂直径	7	7	10
5. 中央矢状径	10	9	12
6. 中央周	28	27	37
4/5 鎖骨断面示数	70.00	77.78	83.33

表16 上腕骨計測値 (mm)

	1号人骨		2号人骨		A	
	女 性		男 性		男 性	
	右	左	右	左	左	
4. 下 端 幅	—	48	—	60	—	
5. 中央最大径	17	17	23	—	27	
6. 中央最小径	12	13	—	—	18	
7. 骨体最小周	48	47	—	—	—	
7(a). 中 央 周	50	51	—	—	—	
11. 滑 車 幅	17	16	—	21	—	
12. 小 頭 幅	13	14	—	15	—	
12(a). 滑車幅および小頭幅	35	35	—	43	—	
13. 滑 車 深	20	20	—	24	—	
14. 尺骨頭窩幅	23	22	—	26	—	
15. 尺骨頭窩深	13	12	—	12	—	
6/5 骨体断面示数	70.59	76.47	—	—	66.67	

表17 桡骨計測値 (mm)

	1号人骨		2号人骨		A	
	女 性		男 性		男 性	
	右	左	右	左	右	左
1. 最 大 長	197	194	—	—	—	—
1b. 平 行 長	296	292	—	—	—	—
2. 機 能 長	185	183	—	—	—	—
3. 最 小 周	30	30	—	39	45	43
4. 骨 体 横 径	12	12	14	15	—	18
4a. 骨体中央横径	12	12	14	15	17	16
4(1). 小 頭 横 径	17	17	—	—	—	—
4(2). 頸 横 径	9	10	—	11	—	—
5. 骨 体 矢 状 径	10	10	11	11	—	13
5a. 骨体中央矢状径	10	10	11	11	13	14
5(1). 小頭矢状径	17	18	—	—	—	—
5(2). 頸 矢 状 径	10	11	—	12	—	—
5(3). 小 頭 周	57	57	—	—	—	—
5(4). 頸 周	34	33	—	38	—	—
5(5). 骨体中央周	34	35	41	42	48	47
5(6). 骨 下 端 幅	26	—	—	—	33	32
3/2 長 厚 示 数	16.22	16.39	—	—	—	—
5/4 骨体断面示数	111.11	100.00	78.57	78.57	—	72.22
5a/4a 中央断面示数	83.33	83.33	78.57	78.57	76.47	87.50

表17 尺骨計測值 (mm)

	1号人骨		2号人骨		A	
	女 性		男 性		男 性	
	右	左	左	右	右	左
1. 最大長	—	213	—	—	—	—
2. 機能長	188	188	—	—	—	—
2(1) 尺骨小頭長	211	210	—	—	—	—
3. 最小周	26	25	—	—	—	—
6. 尺骨頭幅	20	19	—	—	—	—
6(1) 上 幅	—	23	—	—	—	—
7. 尺骨頭深	22	19	—	—	—	—
7(1). 尺骨頭鈎狀突起間距離	—	—	—	—	—	—
8. 尺骨頭高	21	17	—	—	—	—
9. 鈎狀突起機骨側關節面前幅	—	4	—	—	—	—
10. 鈎狀突起機骨側關節面後幅	10	9	—	—	—	—
11. 尺骨矢狀徑	10	—	10	—	14	—
12. 尺骨橫徑	12	12	14	—	18	—
S 中央最小徑	9	—	10	—	14	—
L 中央最大徑	12	—	14	—	18	—
C 中 央 周	36	—	39	—	55	—
3/2 長厚示數	12.32	11.90	—	—	—	—
11/12 骨體斷面示數	83.33	—	71.43	—	77.78	—
S/L 中央斷面示數	75.00	—	71.43	—	77.78	—

表18 大腿骨主要計測值 (mm)

	1号人骨		B		C		D	
	女 性		男 性		女 性		性別不明	
	右	左	左	右	左	右	左	右
1. 最大長	(358)	—	—	—	—	—	—	—
2. 自然位全長	(357)	—	—	—	—	—	—	—
6. 骨體中央矢狀徑	21	22	31	—	—	24	26	—
7. 骨體中央橫徑	22	22	25	—	26	26	—	—
8. 骨體中央周	69	70	88	30	—	83	—	—
9. 骨體上矢狀徑	25	24	29	24	—	31	—	—
10. 骨體上橫徑	19	19	24	—	—	22	—	—
15. 頸垂直徑	24	—	29	—	—	—	—	—
16. 頸矢狀徑	—	—	24	—	—	—	—	—
17. 頸 周	—	—	87	—	—	—	—	—
18. 頸垂直徑	—	—	44	—	—	—	—	—
19. 頸 橫 徑	37	—	43	—	—	—	—	—
6/7 骨體中央斷面示數	95.45	100.00	124.00	—	—	92.31	—	—
10/9 骨體上斷面示數	76.00	79.17	82.76	80.00	—	70.97	—	—

表19 脛骨計測値 (mm)

	1号人骨		A		B		C	
	女	性	男	性	性別不明		性別不明	
	右	左	右	左	右	左	右	左
1b. 脛骨長	—	—	330	—	—	—	—	—
2. 顆距間距離	—	—	315	—	—	—	—	—
6. 最大下端幅	—	43	53	52	—	—	—	—
7. 下端矢狀徑	29	29	35	33	—	—	—	—
8. 中央最大徑	22	23	30	—	28	—	25	—
8a. 榮養孔位最大徑	26	26	35	—	31	—	—	—
9. 中央橫徑	16	16	24	—	20	—	21	—
9a. 榮養孔位橫徑	18	18	25	—	22	—	—	—
10. 骨體周	62	62	84	—	75	—	72	—
10a. 榮養孔位周	70	70	95	—	85	—	—	—
10b. 最小周	56	56	76	—	69	—	70	—
9/8 中央断面示数	72.73	69.57	80.00	—	71.43	—	84.00	—
9a/8a 榮養孔位断面示数	69.23	69.23	71.43	—	70.97	—	—	—

表20 膝蓋骨計測値 (mm)

	A		B
	男	性	男 性
	右	左	右
1. 最大高	38	38	38
2. 最大幅	46	46	42
3. 最大厚	20	20	19
4. 關節面高	31	32	30
5. 内切面幅	22	21	21
6. 外切面幅	25	28	21
1/2 膝蓋骨高幅示数	82.61	82.61	90.48

表22 推定身長値 (cm)

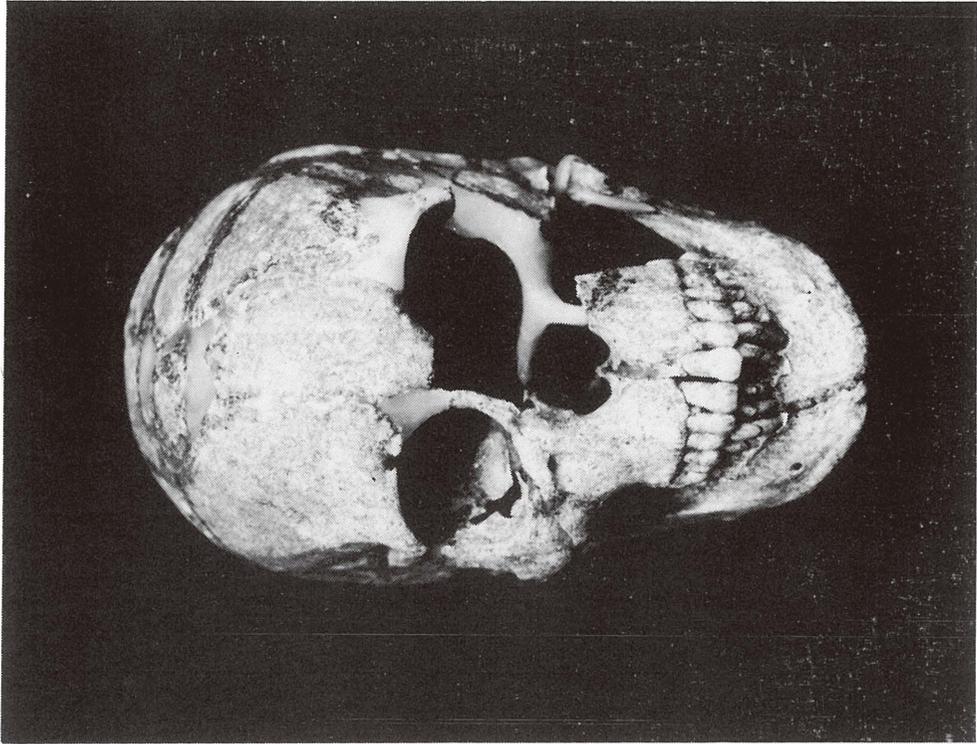
	1号人骨	
	女 性	
	Pearson式	藤井式
桡骨(右)	147.08	144.60
(左)	146.08	144.21
大腿骨(右)	[142.48]	[141.24]

表21 腓骨計測値 (mm)

	1号人骨		2号人骨		A		B
	女	性	男	性	男	性	男 性
	右	左	左	右	左	右	左
1. 最大長	295	—	—	—	—	—	—
2. 中央最大徑	13	12	13	17	16	—	—
3. 中央最小徑	9	9	9	12	10	—	—
4. 中央周	36	36	39	47	45	—	—
4a. 最小周	28	27	—	—	—	—	—
4b. 頸橫徑	9	—	—	—	—	—	—
4c. 頸矢狀徑	10	—	—	—	—	—	—
4(2). 下端幅	17	—	—	22	22	18	—
4(2a). 下端矢狀幅	21	—	—	27	27	30	—
3/2 中央断面示数	69.23	75.00	69.23	70.59	62.50	—	—
4a/14 長厚示数	9.49	—	—	—	—	—	—

参考文献

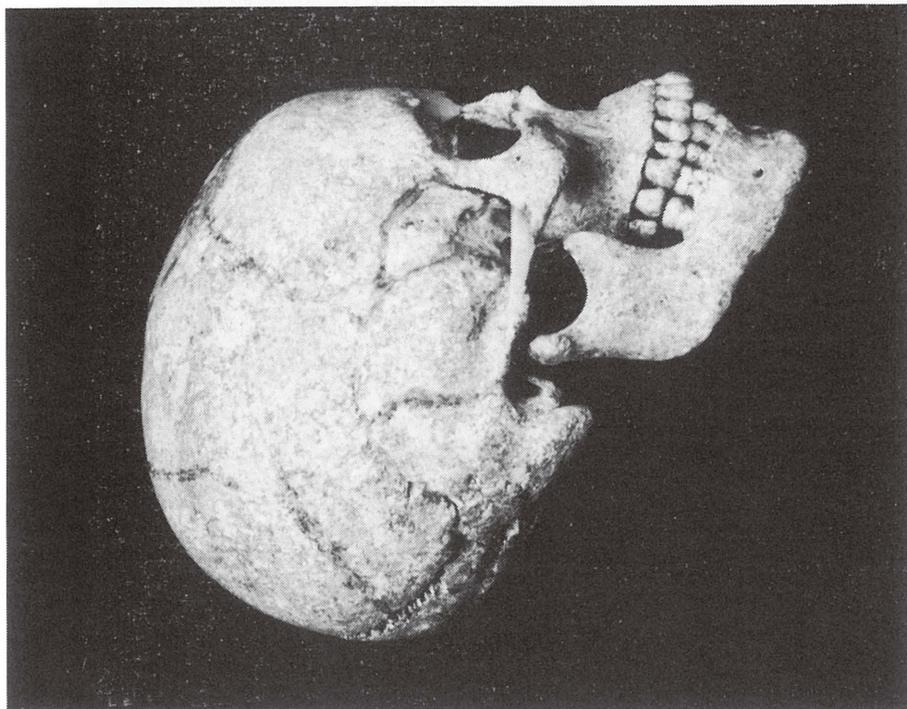
1. Howells.W.W,1974: Cranial Variations in Man. Peabody Museum Papers,vol.67.
2. 金関丈夫、1955: 弥生人種の問題。日本考古学講座、4: 238—252.
3. 金関丈夫、1959: 弥生時代の日本人。日本の医学—第15回日本医学会総会学術集会記録—、1: 167—174.
4. 金関丈夫、1966: 弥生時代人。日本の考古学、3: 460—471.
5. Martin-Saller,1957: Lehrbuch der Anthropologie. Bd.1.Gustav Fisher Verlag,Stuttgart: 429—597.
6. 松下孝幸、1979: 宇宿貝塚出土の人骨。宇宿貝塚、鹿児島考古、13: 210—220.
7. 松下孝幸、1981: 佐賀県大友遺跡出土の弥生時代人骨。大友遺跡(佐賀県呼子町文化財調査報告書第1集): 223—253.
8. 松下孝幸、伊丹陽、1983: 長崎県宇久松原遺跡出土の弥生時代人骨。長崎県埋蔵文化財調査集報VI(長崎県文化財調査報告66)97—134.
9. 松下孝幸、石田肇、1983: 鹿児島県伊仙町面縄第1貝塚出土の弥生時代人骨。面縄第1・第2貝塚(伊仙町埋蔵文化財調査報告書1): 51—64.
10. 内藤芳篤、1978: サウチ遺跡出土の人骨所見。サウチ遺跡: 63—64.
11. 内藤芳篤、1981: 弥生時代人骨。人類学講座5(日本人I)、雄山閣、東京: 57: 99.
12. 内藤芳篤、松下孝幸、1981: 弥生時代人骨。季刊人類学、12(1): 27—37.
13. 中橋孝博、永井昌文、1980: 椎ノ木遺跡出土人骨について。馬毛島埋葬址: 24—34.
14. 永井昌文、1981: 宇宿港遺跡出土の人骨について。宇宿港遺跡: 30—32.
15. 小片丘彦、川路則友、1983: 鹿児島県薩摩郡里村(甑島)出土の弥生人骨について。鹿児島考古、第17号: 67—74.



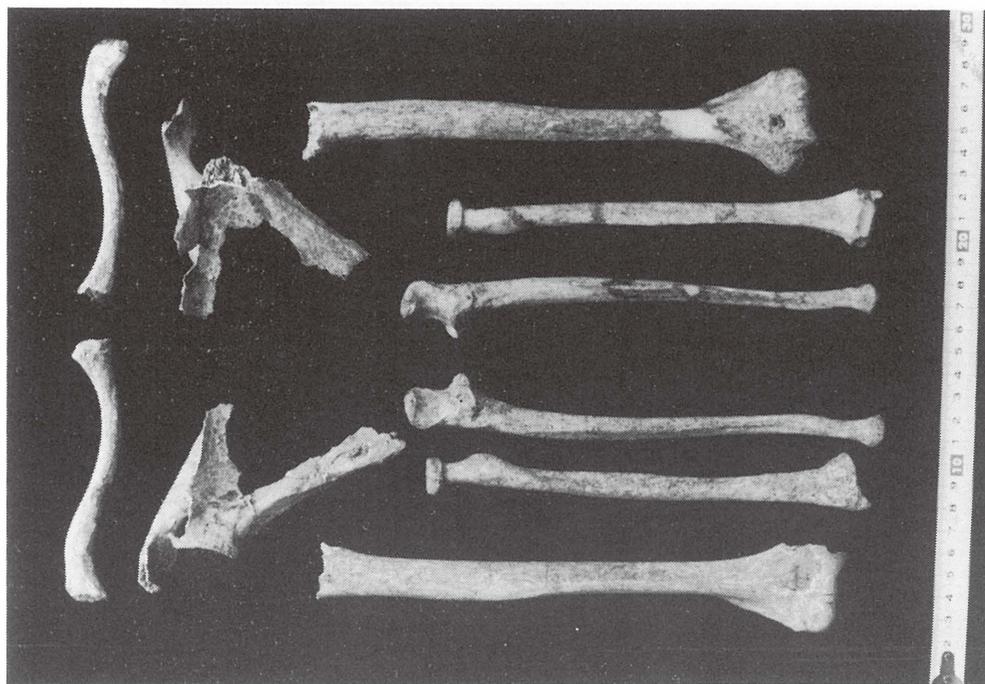
頭蓋前面



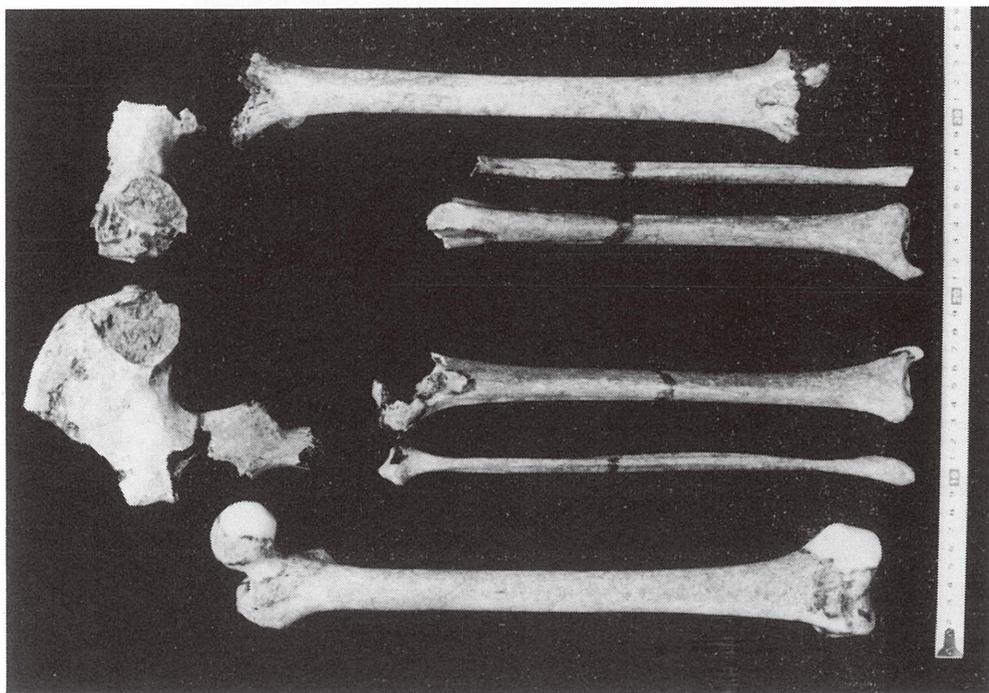
中甫1号人骨(女性・壮年)頭蓋上面



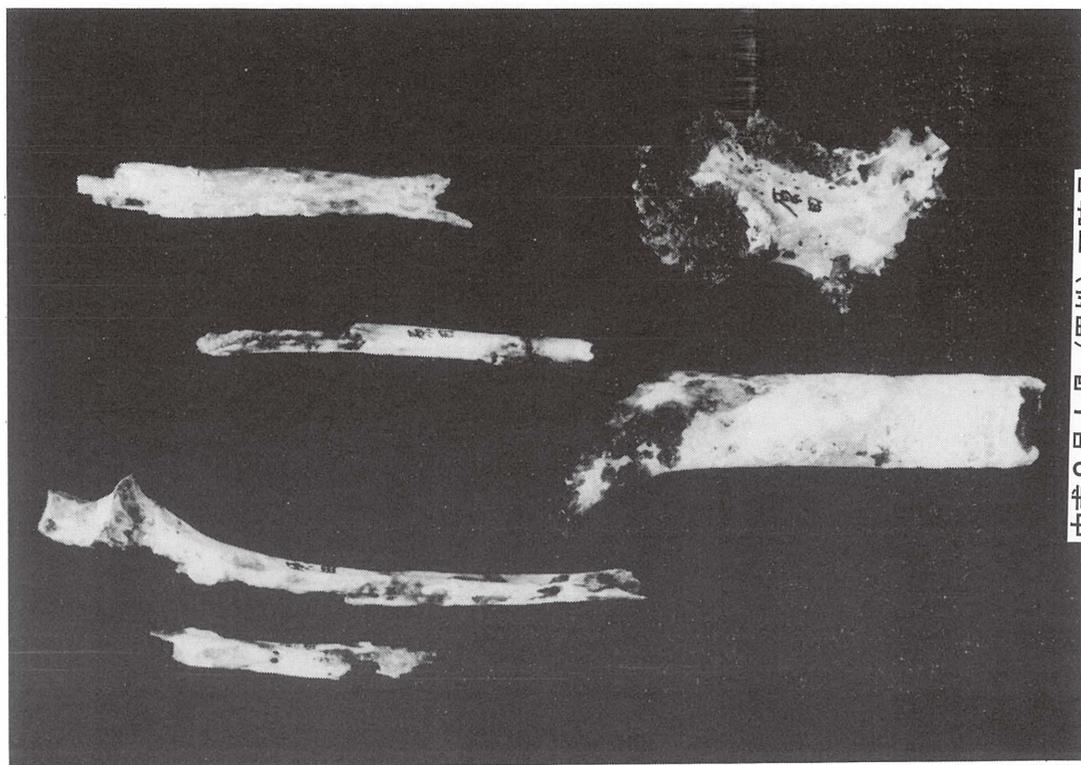
頭蓋側面



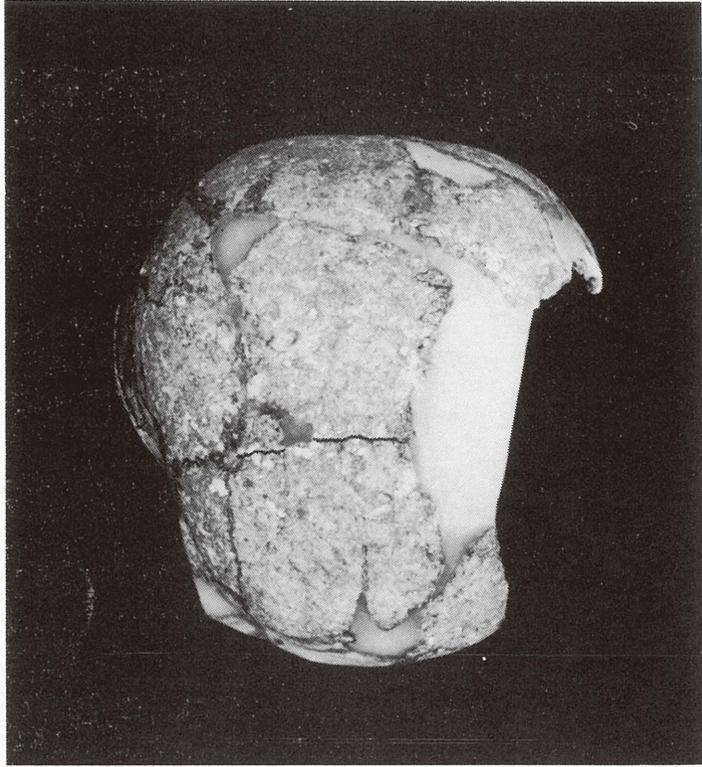
中甫1号人骨(女性·壮年)上肢骨



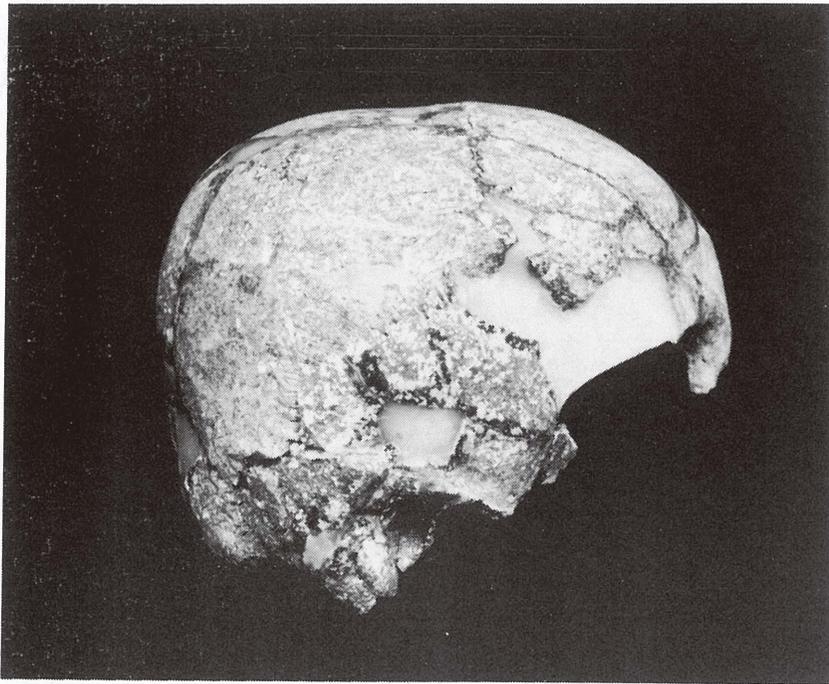
中甫1号人骨(女性·壮年)下肢骨



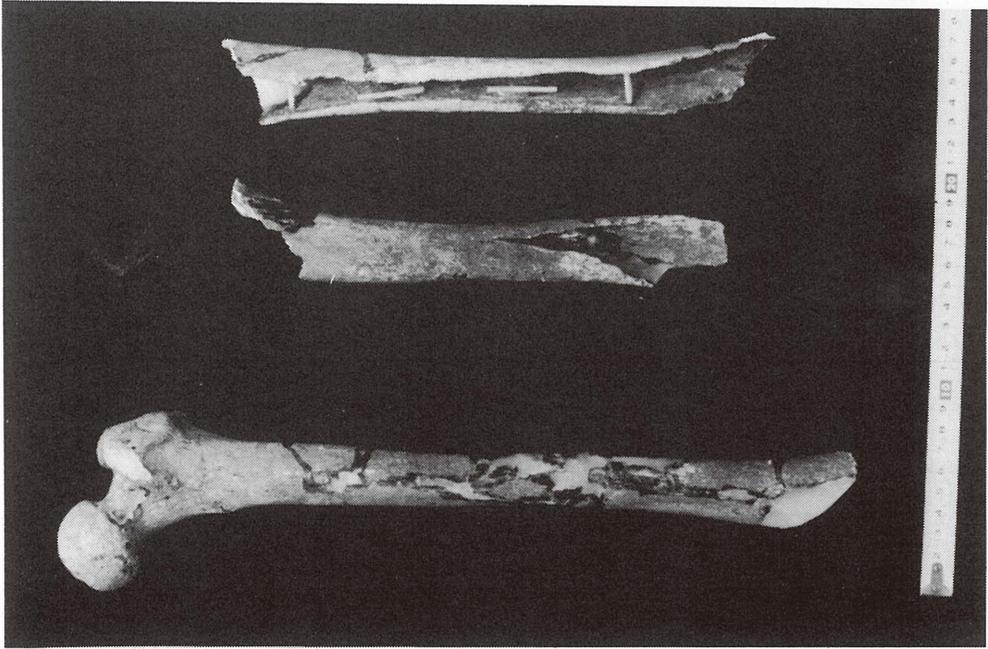
中甫2号人骨(男性)四肢骨



頭蓋 I 上面



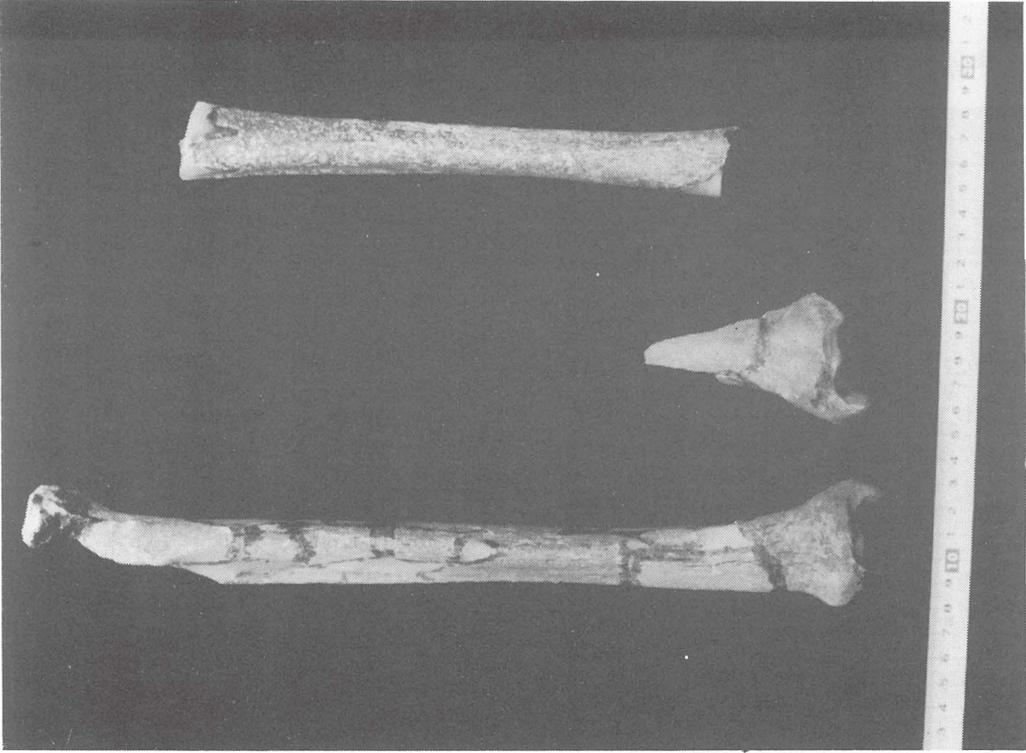
頭蓋 I 側面



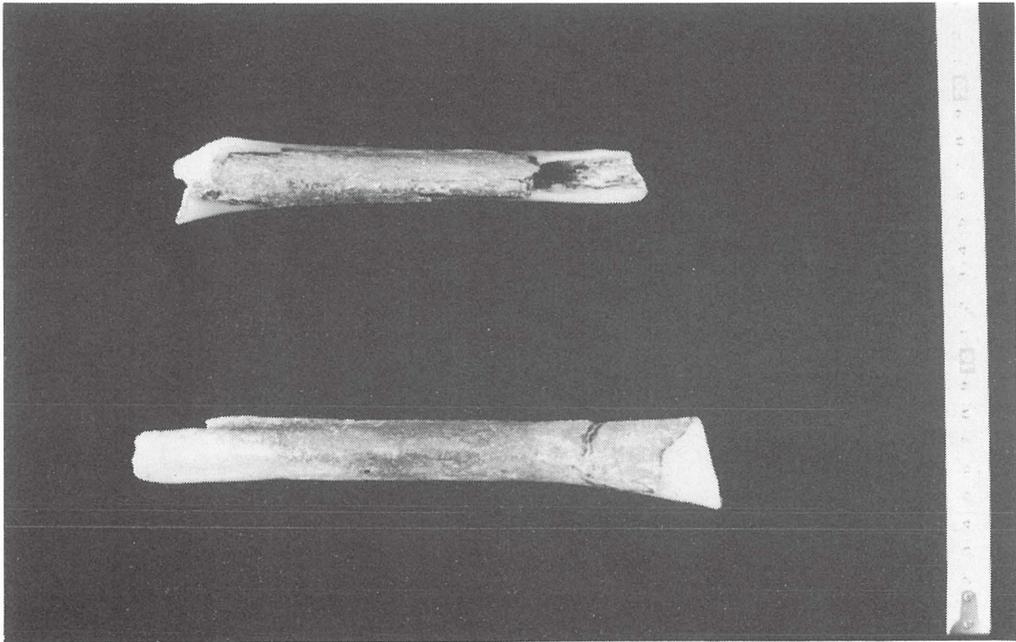
大腿骨 (左=A、右=B)



大腿骨 (左=C、右=D)



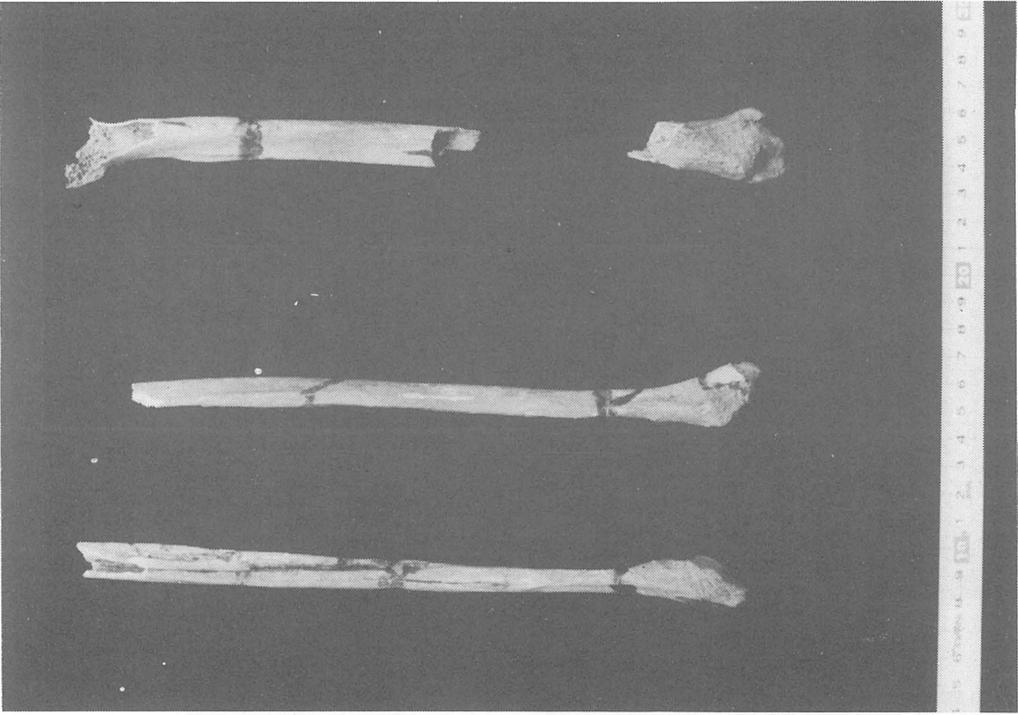
胫骨 (左=A、右=B)



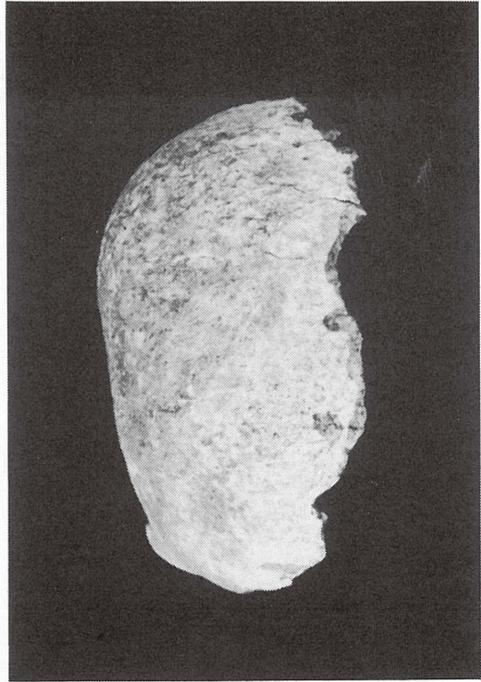
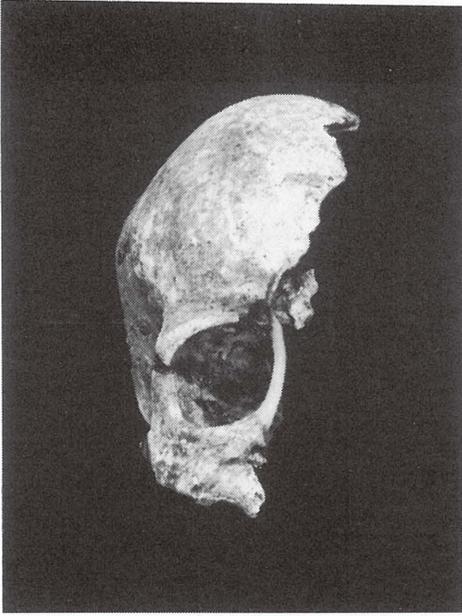
胫骨 (左=C、右=D)



上腕骨A、桡骨A、尺骨A (男性)

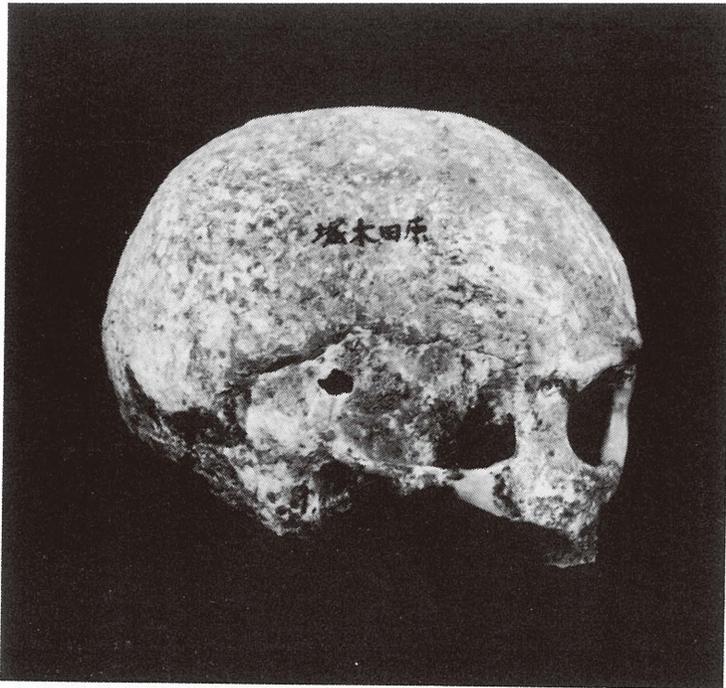


腓骨 (左=A、右=B)



堀木田原古墳人（男性・熟年）頭蓋上面

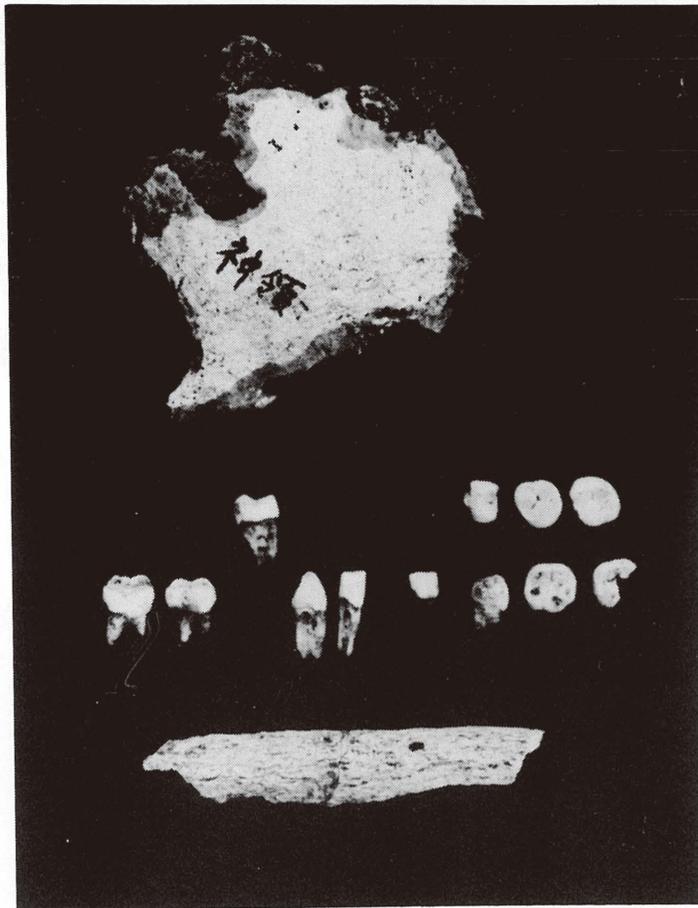
前 面



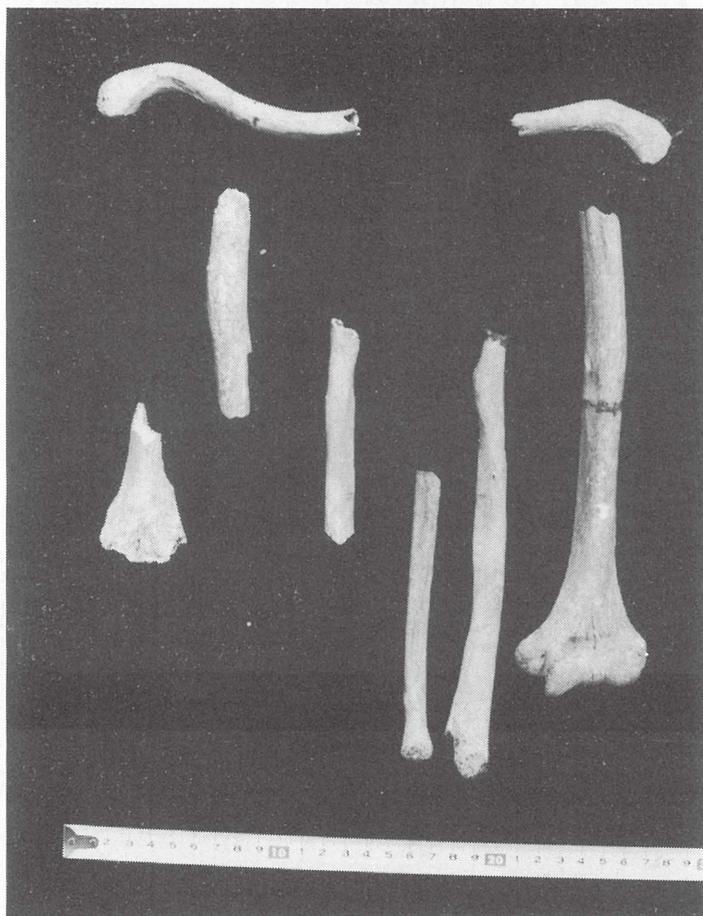
側 面



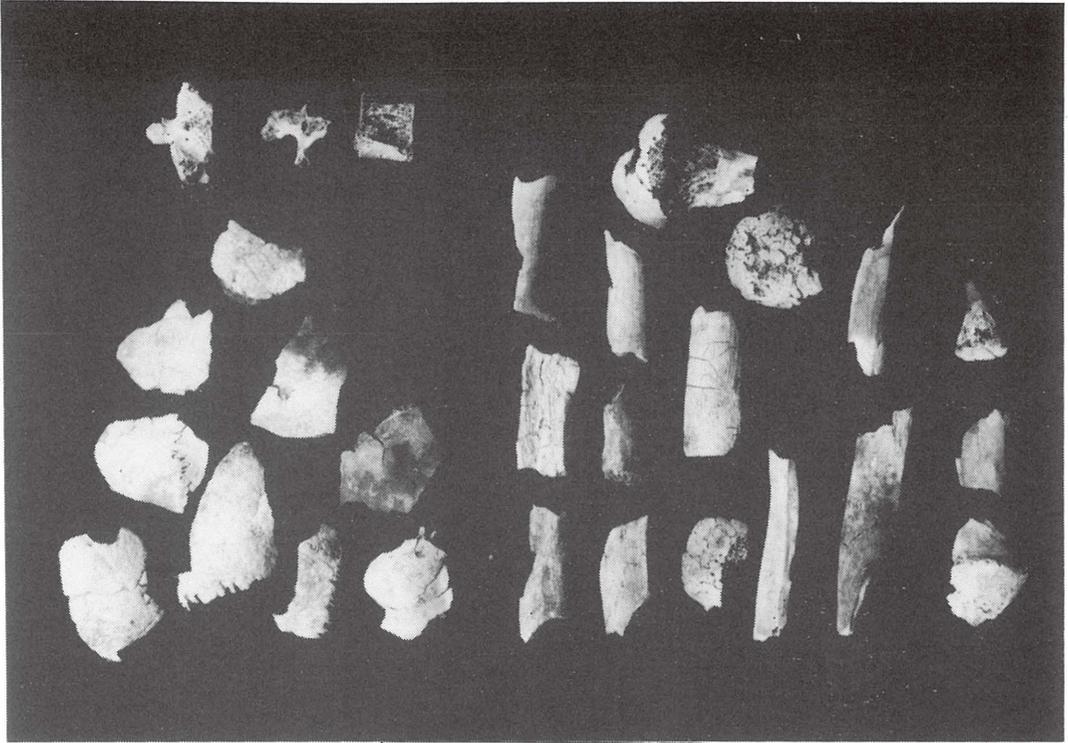
天神原古墳人（外耳道骨腫）



神領古墳人



原田古墳人 (女性)



財部町黒乃遺跡出土人骨



吾平町紺屋遺跡出土人骨